
俺とポケモンと冒険

紅東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とポケモンと冒険

【Nコード】

N0597Y

【作者名】

紅東

【あらすじ】

10数年ぶりにポケモンをプレイし始めた青年は、気が付いたら子供の姿になってHGSSの世界に迷い込んでいた。原因を探るため、元の世界へ帰るため、子供の頃の夢を叶えるためにトレーナーとして旅立つ。ポケモンと共にのんびり冒険をする外見：子供、中身：青年の話。

この物語はHGSSの二次創作小説です。基本的にHGSSの設定や展開を踏襲していますが、ポケレンやアニメの設定の一部が融合した世界観となっています。

プロローグ 1（前書き）

プロローグが3話もありますが、要約すると以下の2点しか書かれていません。

- 1 . ポケモンの世界にトリップ
- 2 . せつかくだから俺はトレーナーになることを選ぶぜ！

プロローグ 1

なんか…寝心地が悪い。背中とかチクチクして不愉快だ。違和感で意識が覚醒してゆく。目蓋ごしにも眩しい光の中で無理やり目を開けると、俺は上半身裸で森に倒れていた。しかもなにか、体つきが幼いような…

「……………はいい？」

状況を確認してからの第一声はこれだった。だって意味分からん。なんで俺、子供の体になって見覚えのない森に転がってるの？昨日は酒も飲まず普通に帰宅して風呂入ってベッドで寝たよ？夢？夢か？夢にしてもなんで森で半裸放置？そーゆープレイ？それともドツキリ？一文無しで1ヶ月樹海生活とか無謀な企画が始まっちゃってるの？黄金伝説よりは水曜ドーデショーや電波少年寄りの企画だな。つか葉っぱが刺さって露出してる肌がイタカユイ。取り敢えず立つか。

どうすんべ、と当たりを見回すけど、木々と葉っぱと半裸の俺と細身のストールしかない。見覚えのないオシャレストールを拾い上げてみる。汚れや臭いはないな。

「裸マフラー」

なんとなく巻いてみたけど、半裸にマフラーってすごく怪しい。

あー…うん、むかーしむかし外国の盗賊は金品と女と身包みまで剥いでも、最後の情けでネクタイだけは残したって聞いたことあるな。全裸ネクタイ。アレ？今俺まさにそんな状況？眠ってる間に強盗事件が発生して身包みまで剥がれるもストール一丁で放り出された？現代日本版情け？なら犯人は武士か？それにしたって半裸にストー

ルってシニール過ぎだろ。いやいや強盗じゃあこの貧相な体つきの説明になってないじゃねえか。

良い感じに混乱を極める俺の意識は、ガサ、と木の葉を踏みしめる音でようやく外へ向いた。

耳を澄ましてみるけど、それきり音は聞こえない。気のせいかもしれない。ふと現在地が見知らぬ森だと言うことを思い出して心臓が早鐘を打った。焦りのまま、けれどなるべく静かに早足でその場を動く。狐や狸ならいいけど、熊とか野犬とか猪だったら勝てる訳ない。隠れる場所のない所でじっとしてるのは危険だ。

なるべく土の露出している、裸足で踏みしめても大丈夫そうな場所を選びながら背の高い木々の合間を抜けてゆく。隠れられそうな場所を探すけど、行けども行けども木々が覆い茂るだけで気ばかりが急く。背後に差し迫った気配はない、と思うけど、気配なんて読めないからよくわからない。とにかく安全な場所へ、出来れば人里へ。わけわからない事だらけだけど生きてればなんとかなるっしょ。

落ち着くよう自分に言い聞かせ、滑り気味でも思考を続ける。だって思考停止したら不意の事態に対処できる確率が下がる。ぼーっと油断してるより身構えてる方がいいに決まってる。つっても今はとにかく逃げる以外できないんだけど。ってゾンビゲームみたいだなやべ、ゾンビものってだいたいバッドエンドだ。思い出すんじゃないかった。

無駄な思考を重ねる間にも手足は動かしている。出来る限り周りにも気を配っているつもりだったが、何かに足を取られ転倒してしまふ。そしてそれっきり金縛りのように動けなくなってしまう…

「まちなさい！…つきやあああああ！？」

半裸にストールで地面に這いつくばっている所を可愛いお嬢さんに目撃されてしまったのだった。合掌。いや、むしろもつと見てゝつてか（ヤケクソ）。

半裸で森林を駆け回る俺を取り押さえたお嬢さんはポケモンを連れ歩く不思議少女だった。そして警察に通報するどころか上着を貸してくれた上に事情を聞いてくれる優しいお嬢さんでもあった。

お嬢さん（といったらもう16よ、あなたより年上だわ。と反論された）はポケモンレンジャーと言う職業で、ポケモンを使って悪さをする悪の組織の調査中に偶然俺を見つけたそう。

ここまで聞いて俺はふーんとしか言いようがなく、お嬢さん改めお姉さんは呆れたようだった。だってなあ、子供の頃にやったことあるよポケモン。通信ケーブル親にねだった世代だよ？今現在10年ぶりくらいに出戻りプレイしてるよ？でもポケモンレンジャーは名前しか知らない。どんな組織なのかわからんし興味もなかったのに、なんだってこんな夢見るんだろ。ヤケにリアルだし。そんな的外れな思考が顔にでていたのか、お姉さんは怖い顔をなすった。

「ちょっと君！ちゃんと聞いてたんでしょね？」

「しっかりお伺いしました」

「じゃあ今度は君の番よ。職質させてもらいます。取り敢えず名前は何？」

「秋野諒、外見は半裸美少年ですが25才、職業は服飾販売員です」

案の定訝しげな顔でふざけないでと怒られた。しかし残念な事にふざけてないんだな、コレが。いや美少年の下りはふざけてたけどそんなに許して欲しい。だって自分でも驚いた事に頭脳は大人、体は子供、その正体は成人男性となってたんですよ。うあー、バロー超なつかし！一番最初のオーブニングとか歌えちゃう世代だよ俺！

お気楽な思考を神妙な顔の下に押し隠し、憤懣やるかたないといった風情のお姉さんへ話しかける。いくら夢とはいえやつぱ逮捕されたくないし。

「ふざけてませんよ。」

昨日まではそうだったんです」

懐疑的な眼差しにも負けず、真剣な顔で真面目にふざけた事実を説明する。

「家のベッドで眠ったはずだったのに、目覚めたら森に倒れていたんです。子供の体になって、半裸にストール一丁で」

真顔のまま緊張感のない要素を付け足すと、お姉さんは咄嗟に顔を伏せて噴き出した。やつぱ半裸ストールって破壊力高いよね。

こほんと咳払い一つ、真剣さを取り繕って顔を上げたお姉さんの雰囲気は、さっきより少しだけ和らいでいる気がした。

「わかりました。とにかく同行してもらいます」

「はい」

「さっきは逃げようとしたくせにやけに素直ね」

だって熊かと思っただんだよ。なんて言うのは女性に失礼だろうな。

「野生のポケモンかと思っただんですよ。丸腰だったからやばいな」
「と思って」

丸腰どころか半裸だったじゃないと顔に書いてある。お姉さんてば結構ツッコミっぱいの口にしなのは職務中だからだろうか。

おもちゃのトランシーバーみたいな何かでどこかに連絡を入れるお姉さんをグライガーに見張られながら待っている（しつぽで立つてる！）、お姉さんの顔がどんどん陰を帯びてゆき何故か一瞬だけ沈痛そうな面持ちで俺を見た。嫌な予感しかないけどまあ夢だし、とにかく聞いてみよう。

「どうしたの？」

「あなたには関係ないわ」

「仕事上の守秘義務？」

頷いてしまえばもう俺は追求できないのに、お姉さんは少しの沈黙の後、今は教えられない、と言った。

「お姉さんの様子からするに俺に関係ある事じゃないか？」

「たぶんね。でも今はだめ。とにかく下山しましょう」

その後はとにかく下山しようの一点張り無限ループで諦めるしかなかった。まあ後で教えて貰えるみたいだし、何より変態じみた格好が辛かったので了承した。

森じゃなく山だったんだゝなんて呑気なことを考えていると、なにやらお姉さんが格好いいポーズ（後で聞いたらキャプチャーと言らしい）でその辺の野生ポケモンを捕まえてきて、俺たちはすぐに麓——ヨシノシティの病院へ向かった。

暖かな春の日差しを浴びながら膝の上の温もりを撫でる。リラックスした様子でくると喉を鳴らすイーブイには、この1ヶ月の間ずいぶん助けられた。

「お前、今日ものんきな顔してんな。今日でお別れなのわかってんのか？」

自分の独り言で休暇みたいだったのに怒涛と過ぎ去った1ヶ月を思い出す。

フスベシティとワカバタウンを繋ぐ45番道路、その辺りを囲む山でポケモンレンジャーのお姉さんに助けられた俺は、その日の内にヨシノシティの森にある精神病棟に収容された。確かに「昨日まで心身ともに25才（男性）社会人だったのに気付いたら10代の少年になって半裸で倒れていた」なんて妄言を吐く奴には相応しい処置だろう。俺もそんなこと言う奴に会ったら笑顔で黄色い救急車呼ぶわ。だけど俺にはそれが現実であり、この入院さえも夢だと思っただ。次に目覚めたらいつも通り出社して、同僚兼ポケモン仲間に変わった夢見たって話しておしまい。そう思っていたのに、目覚めても目覚めても病院の白いベッドの上で、検温にやってくる看護師さんはハピナスやラッキーを連れている。

そんな日が一週間ほど続き、俺はようやくポケモンの世界に迷い込んだと言う現実を受け入れた。しかし病院側は妄言を繰り返す身寄りも住民票もない正体不明の俺にお手上げ状態。そりゃそうだ、異世界から来ましたなんていくらポケモンの世界でもありあえない。けれど幸い症状は軽いと判断してくれたらしく、通院とGPS監視を条件に退院を許されたのが一週間前。そして明日にはここを旅立つ予定だ。

なんて今でこそただの事実としてこの現実を受け止められているけれど、異世界に迷い込んでしまったと気付いた時はかなり不安定になっていた。それこそ精神科にお世話になるような精神状態。

そんな俺に先生は病名はおろかろくな状況説明もせずただ休むように告げた。先生は患者に余計なストレスを与えないように配慮したらしいが、それこそが俺にはストレスだった。

判断力も記憶力も自分では問題ないと思うのに他人には精神病患者として扱われる。昨日までの日常は全て妄想だったと否定される。それで不安定にならない訳がない。

日に日に顔色も食欲も失くして行く俺を救ってくれたのは、イーブイとポケモンセラピストの先生だった。

最初は一日一緒に過ごしてみないかとイーブイを預けられた。どうしたらいいのか戸惑う俺の腕からずるりと抜け出したイーブイは、マイペースにも院内を散策しだした。不眠と食欲不振に加え軽い運動までこなし疲れ果てた俺は、中庭の木陰で力尽きてしまった。座り込む俺を置いて消えたイーブイを探す気力もなくなっていた。座ると、件のイーブイがペットボトルをくわえて戻ってきた。気遣いに不覚にも涙を零してしまった俺などお構いなしに、イーブイはボトルを置くと俺の膝へ乗り上げ、のんきにも昼寝を始めた。すやすや幸せそうに眠るイーブイに乗っかられて動けなくなった俺は、暖かい日差しと膝の温もりに助けられて3日ぶりに眠ることができた。

夕方、イーブイを迎えに来たセラピスト先生に報告とお礼を告げると、そのままイーブイを預けてくれただけでなく、翌日からは気晴らしにとたわいない話をしに来てくれるようになった。

後で聞いた話だが、俺の主治医は問題のある人物なのにコネがあるから辞めさせられない、つまりヤブ医者だったらしい。

災難だったね、と悪戯っぽく笑うセラピスト先生の尽力で主治医は変わり、気が滅入る診察や事情聴取ものんきなイーブイと過ごす時間が癒やしてくれた。

なぜか首筋にバーコードらしき入れ墨が発見されたり俺が倒れていたり山に悪の組織の秘密基地（荒らされ済み）があったことが判明したりそこから子供が逃げ出した形跡があったり、明らかに逃亡した子供は俺！という証拠が上がり、俺は悪の組織に捕まった子供でありに辛い過去から記憶を捏造し逃げ出した可哀想な子、というで落ち着いた。落ち着いたと言うのは結局事実がわからなかったからだ。記憶捏造にしては俺の記憶はしっかりしすぎているし、精神も至ってまともらしい。俺のポケモン知識はゲームからだからちよつと現実味に欠けるものの（ポケモンの食事とか睡眠とか、生命維持について知識がなかった）、バトルの相性や育成方法、卵技などの知識に間違いはない。対人関係にしても礼儀正しく常識的で、判断力も正常と御墨付きを頂いた。

となると戸籍がないとは言え正常な子供を病院に閉じ込めておけない。そういう事で幾つかの選択肢を与えられた。里親の子供になるか、レンジャーになるか、トレーナーになるかだ。

俺は迷わずトレーナーを選んだ。

どの選択肢も戸籍の作成と最低限の生命維持の保証、移動の制限は共通している。トレーナーの場合は輪をかけて制約が多く、行動範囲はジョウト地方に限定、GPS機器の装着、定期的な検査の受診、電話での定期報告、レンジャーや警察に協力を惜しまないなど条件をつけられた。けれど25才にもなって里子はお断りだし、見知らぬ土地でポケモンだけでなく自然を守るとかそんなターザンの根性はない。それにせつかく人生をやり直すなら、子供の頃憧れたものになりたかった。

という訳で明後日、俺は新人トレーナーとしてワカバタウンから旅立つことになっている。そのために明日の朝、ここから去る。当然そんな事情をイーブイが知る訳もなく、ただ明後日にはお別れなんだとは告げてある。告げてあるけどイーブイはいつも通りのんきな

様子で散歩と昼寝を楽しみリラックスしている。

うりゃ、と首のふさふさに指を突っ込んでかいてやる。心地良さそうに目を閉じて身を預ける人懐っこいイーブイをセラピスト先生はベテランだと言っていたから、別れにも慣れているのかも知れない。

「お前にとっちゃ俺なんて所詮その他大勢にすぎないのね…！」

うつつ、と口元を押さえて一人芝居してみるものの、イーブイは撫で続ける右手に夢中で見向きもしない。

「なんだよー付き合えよー」

ひょいと抱き上げて目線を合わせるが、もっとなでれとばかりにその丸い頭で頬をぐりぐりされた。

寂しいのは本心だったが、このイーブイを見るとなんだか安心できる。何年たってもこいつはここにいて、変わらない気がする。目まぐるしく俺の全てが変わって行ったこの一月、まったく変わらなかったみたいにかいつはマイペースに生きて行くんだろう。だから診察に来るたびこいつに会えるはずだ。

その考えは、身寄りのない俺にとって暖かい感情を感じさせてくれた。寄りどころって大事だよな。

穏やかな風に乗って四時を知らせる明るい音楽が届いた。そろそろ明日の準備をしなくちゃいけない時間だ。

「言われるまでもないだろうけど、元気でやれよ」

感謝を込めて撫でながら俺は立ち上がり歩き出した。

3（後書き）

長いプロローグを読んで下さってありがとうございます&お疲れ様でございます。

始まりを告げる風が吹く町、ワカバタウン 1

見送りに出てくれた先生や看護師さんたちに挨拶していると、イーブイを抱えたセラピストの先生がやってきた。

イーブイは寝坊助で朝7時じゃまだおねむもおねむ。先生の腕の中でよだれたらして寝こけている。起こさないように優しく撫でてから俺はシルバースプレー片手に歩き出した。

裸一貫どころか戸籍作成からスタートとなった俺には国から補助金が出ていた。何枚かの着替えとトレーナー必需品であるトレーナーカード、GPSの付いたポケギアを購入したから残り5000円しかない。

けれど先生たちからお餞別という名目で、ポケギアの拡張データであるマップやランニングシューズ、寝袋、雨合羽に日持ちする携帯食などなど融通して貰えた。お陰で初めての道でも迷うことなく、3時間程で目的地を望むことができた。近づくことに草むらを揺らす風が強くなり、俺は帽子を深くかぶり直す。

「はー、ここがワカバタウン」

さすが始まりを告げる風が吹く町というだけあって、潮の香りを含んだ気持ちのいい風が吹いている。ストールもぴろぴろはためきまくりだ。

ゲームよりは民家が多く見てとれたが、町というには閑散とし過ぎている。ワカバタウンに入ってまず目につくのはウツギ博士の研究所。全国展開を唱うフレンドリーショップやポケモンセンターさえない町では、鉄筋コンクリートの大きな住宅は嫌でも目に付いた。やっべえ、テンションあがってきた。本当に冒険の旅に出ちゃうのか俺。

インターフォンを鳴らすべく興奮気味に大股でウツギ研究所へ近付く。そうだ、その前にちょっと確認。実はウツギ博士から御三家を貰えると聞いた時からポケモン以外にも期待してるがあった。こっそり研究所の左側を覗いてみると、赤髪の少年が研究所を覗き見しているところだった。

おお、本当にいる…さすがゲーム(?)

正直、本当に居るとは思っておらず、思わずまじまじ見つめてしまった。覗き魔を覗くという通報されたら任意同行させられてしまいそうな状態は、少年がこちらへ気付いた事で終わった。逃げる間も視線を逸らす間もなくこっちへやってくる。おーおー眉間の皺が物凄いいことになってるね。ブルドックみたいだよ。

大股で近寄ってきた少年は俺を突き飛ばそうとしたけれど、想定内なので一歩後ろに下がり避ける。少年はつんのめってたたらを踏んだ。

「大丈夫？」

「うるさい！」

すかさず聞いてみたら怒鳴り返されてしまった。

君の方がよっぽど煩いと言い返す間もなく少年は町の外へ飛び出して行く。

つておおい、ポケモンも持たずに行ったぞあの子。大丈夫なのか？あ、なんか飛び跳ねて……おー、顔面から転んだ。……………起き

上がらないな。いや、起き上がれないのか？助けを呼ぶべき？

ウツギ博士に知らせるか迷っていると、背後から扉が開く音。

振り返るとヒノアラシを連れた少年が出てくるところだった。その見覚えのある姿にテンションはうなぎ登りだ。

「こんにちは。ウツギ博士に用事ですか？」

印象的な前髪の少年がにこつと笑う。白いフード付きトレーナーの上に細身の赤いジャケットを纏い、黒の七分丈パンツは大人がやるもれなく大惨事になる向こうずね見せスタイル。紛れもなくHGSの男主人公だった。なんだかにこにこしてて感じの良い子だなあ。

「初めまして、俺はリョウ。ウツギ博士にポケモンを貰いに来たんだ」

「じゃあ僕と一緒にだね」

なんだか嬉しそうに笑う男主人公の足元では、ぽかんと口を開けたヒノアラシが俺を見上げていた。

「僕はヒビキ。この町に住んでるんだ。こっちはヒノアラシだよ」

主人公にデフォルトネームあるって知らなくて適当に付けた口なんだけど修正されてんのな。ってかゲームの世界に入り込んだわけじゃないんだろうか。情報が少なすぎてわからないな。

頭の片隅で考えつつヒノアラシにもこんにちはと笑いかけたら、ぽつと背中から小さな火を出してヒビキの後ろに隠れてしまった。

「ごめんな、こいつ照れ屋ですぐ隠れちゃうんだ」

「可愛いな、めっちゃはみ出てるし」

「そうなんだ。本人は隠れてるつもりみたい」

うわぁナニソレすげえ可愛い。口には出せないけど頭足りてなくて可愛い。

「お馬鹿で可愛いだろ？」

俺がせっかく慎んだ感想を、ヒビキは輝かんばかりのイイ笑顔で言

い放った。ヒノアラシががん！とショックそうに見上げてるけどいいんだろうか。

「なんか和むよね」

あわあわしてるヒノアラシを見ながらの追い討ち。ヒビキって結構イイ性格してんだな。でもま、

「わかる、可愛いくて和むよな。撫でてもいい？」

「うん、いいよ」

しゃがんでヒノアラシに手をのばす。緊張した面もちで固まっていたけど、うりうり撫で回すとすり寄ってくれた。

「照れ屋のわりにはなつつこくないか？」

「う？うーん…まだよくわかんない」

「そっか、今日会ったばかりだもん」

「うん。でも今日からずっと一緒だよ。な、ヒノノ」

「ひの」

ぽつと背中から火が出て、俺はとっさに手を引いた。ヒノアラシは照れたらしくヒビキの背に隠れてしまう。

「大丈夫だった？」

「うん、撫でてたの頭だし」

心配そうに聞いてくるヒビキの後ろから不思議そうな顔がのぞく。火傷させそうになったとは気付いてないんだろう。なにかある度に火を出すんじゃ、躰が大変そうだなあ。

「ところでさ、ヒビキくんたちはこれからどこか行くところ？」

たぶん今からポケモンじいさんのところへお使いなんだろうけど聞いてみる。確認は大事だ。

「うん、ちょっとヨシノシティの先までお使いなんだ」

「まじで？大変だな。結構遠いじゃん」

当たり障りのない事を口にしながらも内心はシナリオ通りの展開に喜んでいた。この後もシナリオ通りに進んでくれれば俺は頭の可笑しい人を完璧に卒業だ。

「そう、だから今日はポケモンセンターにお泊まりなんだ」

何もかもが初めての経験なんだろう。興奮と期待がない交ぜの楽しそうな笑顔にこちらまで心が弾む。

「じゃあ帰宅は明日なんだ？あのさ、俺は明日ポケモン貰う予定なんだよ」

「じゃあ僕が1日だけ先輩だね」

ああ、小学生くらいの時って誕生日が1日違うだけで”俺のが年上”なんて喜んでたっけ。なんかアレ結構鼻につくんだよな。けどとはにかむヒビキからはそう言うのを感じない。っていうか微笑ましい。これはヒビキの性格のせいなのか、俺が年をとったからなのか。

「そう、だからヒビキ先輩、帰ってきたらバトルしようぜ」

言っただけたんヒビキは少し目を見開いてフリーズしてしまった。なんか変なこと言っただけかな。

「だめかな？」

「ううん！先輩って言われてびっくりしただけ」

ヒビキは再びにこーっと人好きのする笑顔を、今度は満開で見せた。

「なんか先輩っていい響き！」

子犬みたいなはしゃぎっぷりにこちらの顔も自然と緩む。今時こんなピュアな子は天然記念物だろう。俺がシヨタがバイだったら危うく恋が始まる所だった。

「ヒビキ先輩かわいい〜」

「ありがとー、よく言われる。でもね、僕男前だから。そこんこよろしく」

「ほほう…どこらへんが？」

「全部！」

だめだ、この子犬系少年のどこに男らしさがあるのか理解できん。すっかり和んだ空気へ割り込むように、どこからか音楽が聞こえてきた。反響して不協和音になっているがフレーズに聞き覚えがある。多分ワカバタウンのテーマだ。

「もう10時だ。そろそろ行かなくちゃ」

「ああ、今の曲って時報か。変な時間になるんだな」

「そうだよ。あと8時と4時にもなるんだ」

なるほど、その時間には思い当たる節がある。ゲームではなかった

親切設計があるらしいな。

「たぶんポケモンの活動時間に合わせてじゃないか？」

はっとした後、真顔で見つめられて少し戸惑った。なんだなんだ、どうしたんだ？

「……………リョウくんって天才？」

「……………ヒビキ先輩が天然入ってるだけに一票」

この子、1人でお使いにだして大丈夫なのか？

ヒビキを見送り、今度こそウツギ博士を訪ねた俺はコトネの家へ向かっていった。

ウツギ博士いわく。

『僕トレーナーとしてはまったく才能ないんだよね。だからお隣のコトネちゃんに教わっておいで』

だそうで。そんなんでどうやって進化の研究してんだと突っ込みたかったが、博士は俺みたいな得体の知れない奴に御三家を譲ってくれる天才的なボケ……いや、奇特……もとい大変心優しい人だ。なんかこう、友情ゲットとか育て屋さんとか大人のコネとか大人のコネとか大人のコネでなんとかしてるんだらう。

それにしてもたらい回しってどうなんすか博士。

あまりに適当な対応にちよっと遠い目になりつつ足を進める。実は研究所を出てからずっとコトネの家もヒビキの家も見えているから迷いようもないんだ。けど、その見えてるお隣さんが軽く200mは離れてるって。さすが田舎町としか言いようがないなあ。老後を過ごしたいくらいのどかな場所だ。

ぼけーっと歩いて5分程で到着したコトネの家の呼び鈴を鳴らす。ゲームでは不法侵入が当たり前だけど、この世界でそんなことしたらだめだと思う。確認はしてないけどさ、インターフォン付いてんなら使わないとな。

リンゴーン、と教会の鐘のような音が鳴ると、中から2つの軽い足音がパタパタパタと重なって聞こえてきた。そしてガチャリと開いた扉から青い球体が、かの有名な雑巾がスーパーボールのように飛び出してきた。

「りるる〜」

くるりと俺の周囲を一周した雑巾、もといマリルは扉を開けた主の腕に戻っていく。

「こんにちは、はじめまして。あなたがリヨウさんね」

につこりと小作りな顔が笑う。2つに結んだエクストリーム外ハネと某子猫ちゃんを彷彿とさせる帽子につい目が行ってしまいがちだけれど、コトネは文句なしの美少女だった。大きな瞳と桃色の唇、肌は淡いピンクがかった白で頬には健康的な朱色がさし、細すぎない手足がすんなり伸びている。

「そうです。はじめまして、コトネちゃんにマリル。今日はよろしくお願いします」

「あ、えっと、そんなに畏まらないで下さい。私の方が年下ですからっ」

「うん、そうだね。じゃあ改めまして。よろしくお願いします、コトネ先生」

「え、えええ？」

改める場所が違う！って言うかよけい畏まっちゃってる！とますます困惑するコトネを見ているのは楽しいけど、いつまでもからかってちゃ話が進まない。

「冗談だよ。よろしくな、コトネちゃん」

「あ、はい！」

あらら、今度はコトネが畏まっちゃってら。

「コトネちゃんもさ、さんなんて付けなくていいよ。あんまり年変わんないだろ？」

トレーナーとしてはコトネが遥かに先輩だと言うことはあえて口にしないでおく。緊張させるだけっぽいし。

「んーと、じゃあ、リョウ、くん？」

「うん、なあに？」

なにその恋人になったばかりみたいな呼び方！あんまりに初々しいんで突っ込みたかったけど我慢だ我慢。

「リョウくんはまだポケモンいないんだよね」

「ああ、借りた子はいるけど俺の子じゃない。明日譲って貰う予定だよ」

「じゃあ取り敢えずバトルと捕獲のやり方教えるね。あとは…」

「食べさせて良いものとか、お風呂の入れ方とか、トレーナーとしての常識なんかが知りたいな」

「わかったわ。じゃ、いこっか！」

弾むみたいに雑巾、じゃねえ、マリルが腕から飛び出して町の外へ先導する。

「マリルって小さいのにすごく元気なんだな」

「私のマリルは特別元気なのよ。野生みたいにのびのび育ってるからね」

そういやウツギ博士が連れ歩きの研究はじめたのってコトネが雑巾…マリル…ああもう雑巾でいいや。雑巾を連れ歩いてたからなんだよな。この世界じゃある意味原点にして頂点なのかも。

あ、でもそれ言ったらゲーフリはアニメのピカチュウ見てイエロー作っただんだけ。で、それを元に今作の連れ歩きになったんだよね。やっぱ原点はレッドとサトシかなあ。

「ね、リヨウくんはもう貰うポケモン決めてるの？」

「ああ、希望はチコリータなんだけど」

「そっか、よかったね。きっと希望通りになるよ」

「え？」

一瞬コトネがこの後の展開を、ワニノコが浚われるのを知ってるのかと驚いた。が、よく考えるまでもない。ヒビキに貰われたのがヒノアラシだからそれ以外なら貰えると考えたんだろう。そうだな、そうじゃなきゃ怖すぎる展開になるよな。

「ヒビキくんがヒノアラシ連れてったから？」

「なんだ、もうヒビキに会ってたのね」

よかった、ひぐらし的展開じゃなくて本当によかった！

ワカバタウンのほど近く。俺はコトネの斜め後ろから戦況を見守っていた

「マリル、体当たり！」

でし、と重いんだか軽いんだか解らない衝突音。体当たりされたオタチが後ずさる。
しかしぶるぶると首を振ると、すぐに体当たりを仕返して来た。それを受けつつ上手く後退した雑巾は、オタチから目を逸らさずにコトネの指示を待っている。

「マリル、もう一度体当たりよ」

「りるー！」

愛らしい姿からはちよつと想像つかない素早さでオタチへ向かって行く。かわすべく右へ動いたオタチに合わせて雑巾が突っ込む。確実に胴体を捉えた体当たり、オタチはたまらず這いつくばった。音だけ聞いているとまぬけなんだけど、生で見ているとなかなか迫力がある。

「こんな風に弱つたらボールを投げるのよ」

軽く放物線を描いて放られたボールはオタチに当たる寸前、ぱくりと開いて網状の白い光を発した。それがオタチをボールに引きずり込んで地面に落ちる。

まるで起き上がり小法師みたいにぐらぐらぐら、と揺れると、思わず腹筋に力が入った。オタチの捕獲しやすさについていくつだっけ？マ

ツクスじゃなかった気がするな。

じっと見守る中、三度揺れたボールは静まり、カチツと何かがロックされたような音が聞こえた。ちなみに脳内では例の音楽が鳴り響いていた。

「う、わあ、すげえ、捕まえちゃったよ！」

アホみたいな感想を口走る俺にコトネは笑う。ボールを拾い上げると、近寄ってきた雑巾の頭を撫でて労った。

「今は成功したからいいけど、失敗するとモンスターボールって二度と使えなくなるんだよ。ゴミだけちゃんと拾って、フレンドリーシヨップやポケモンセンターにある指定のゴミ箱に入れてね」

「はい。でもなんで使えなくなるんだ？使い捨てだから、じゃ理由にならないよな」

苦し紛れに口にした答えは抽象的で曖昧なものだった。

「リョウくんって本当になんにも知らないのね」

「面目アリマセン。」

「教えて下さい、コトネ先生」

道中で俺のおふざけに慣れてきたコトネは苦笑いした。

「先生じゃないつつの。」

捕獲に失敗するって言うのは、ボールを壊されるからってことだから」

なるほど、そりゃ使えないわな。

「あ、じゃあ、逃がして空になったボールは？」

「それも使えないから、もったいないけどゴミ箱行きね」

「ふうん、なんで使えないんだろ」

「詳しくは私も解らないんだけど、ボールの仕様らしいの」

仕様 か よ ！

まさかの大人の事情に思わず突っ込みそうになったけど、コトネは悪くない。

「大人の事情か」

「大人の事情って？」

「製造会社が儲けるために使い捨てにしたのになってこと」

「うーんとね、なんかね、ちゃんと理由があるんだよ」

「理由？」

利益追求だけじゃないのか。訊ね返すと、コトネは何かを思い出すように視線を中にさまよわせた。

「んーとね、ボールってポケモンが入るとそのポケモンの情報が書き込まれるんだよ。捕まえた人のIDと日時と捕まえられたポケモンの種類と性別、性格や特性なんて細かい所まで。

その情報をボールに記録しておくことでポケモンを拘束するから、上書きも消去もできないの。だから使い回しはできないんだって」

ふうん、なんとなくDVD-Rを思い出すなあ。DVDデッキを買った当初、上書きできないことを知らずに買ってびっくりしたことがある。DVDでは通過儀礼みたいなもんだよな。

「なるほど。それなら盗難とか防げるな」

「そうだね」

どういう原理で性格とかわかるんだって突っ込みたいけど、まあ詳しい理由なんざ解らなくてもそういう”仕様”だと知っておくのが大事だよな。

「あ、そうだ。でね、そのボールなんだけど」

先ほど捕まえたばかりのオタチのボールが差し出される。中央のボタンを押すとボールは小さくなった。

「こうやってボタンを押すと小さくなったり大きくなったりして、大きな状態じゃないとポケモンは出入りできないの。それから大きな状態だと、ポケモンも外の様子が判るけど、小さくしてるとわからないんだって」

言いながらボールを大きくする。小さい状態はスリープモードみたいなもんだろうか。

「だからトレーナーはホルスターに大きな状態で付けておく人がおおいわ」

「戦闘の時、指示出しやすいからか？」

トレーナーの指示に従うとはいえ、戦局を把握していた方が動きやすいだろう。

「それもあるけど、単純に同じ時間を過ごしたいって人が多いよ。で、大きな状態でなげると…」

ぼん、とぐぐもった破裂音と共に捕まえたばかりのオタチが現れる。捕まったばかりだからだろうか、何うようにじっとコトネを見つめ

ている。

「はい、これがこの子のステータスよ」

「へえ、ポケギアで確認できるんだ。図鑑がないと見れないと思ってた」「やだ、それじゃ困るじゃない。図鑑なんてめったに持てる物じゃないんだから。ちなみにポケギアが普及する前はボールで確認してたのよ。」

ホラ」

差し出されたボールの上部、赤い半球にコトネが触れると白い小窓が現れる。そこにはゲームで見慣れた戦闘画面が、小窓の下方にオタチのHPと経験値が表示されていた。

「この上の空いてる部分にはバトル相手の情報が出るの？」

「当たり前。あと、こっやってタッチすると……」

小窓に触れる度に画面が切り替わり、詳しいステータスや性格、出会った場所が代わる代わる表示されていく。アニメのイメージしかなかったからこんなハイテクなもんだと思わなかったよモンスターボール。

「すげえ便利だな」

「うん、それも善し悪しなだけだね」

困ったように笑うコトネが何を言いたいのかわからない。

「何か問題でもあるのか？」

「ん……ボールにはないんだけど。リョウくんはさ、旅にでるんだよね？」

「ああ、バッジを集めるつもりだよ」

言葉を探すように視線が泳ぐ。それとも言い出し辛いだけだろうか。

「なにか話辛いことでもあるのか？」

「ん、そう、かな」

「俺は素直なよい子だから、先輩トレーナーの忠告は有り難く拝聴しますよ？」

「え、えええ！？」

どつから突っ込んだらいいのが解らない、と困惑を浮かべながらも笑ったコトネは、なぜか吹っ切れたように言った。

「リョウくんなら心配なさそう」

「なんかわかんないけど褒められたっばい？」

「うん、誉めてる誉めてる」

「うわ、テキトー」

笑いあうとコトネにはもう元気が戻っていた。よくわかんないけど大丈夫ならいいさ。

「じゃーそろそろ戻っておやつにしようか。マリル、オタチ、帰るよー」

いつの間にかマリルと遊んでいたオタチをボールに戻し、俺たちは連れ立ってワカバへ歩き出した。

物慣れないオタチを雑巾が危なげなく誘導していく。有り余るほど元気な雑巾だけど案外面倒見がいいみたいだ。コトネは口を出すわけじゃないが、それでも2匹を気にかけている。ゲームじゃわからなかったけど、こんな風に関係を育てるのも育成の一つなんだろうな。

「コトネはマリルとどのくらいの付き合いなんだ？」

「生まれた時からだよ」

「トレーナーって10才以上じゃないとなれないんじゃない？」

病院にいる間に調べたトレーナーの資格は、10才以上が絶対条件のはずだったけど。

「トレーナーになったのは今年になってからだよ。でもね、家族と一緒に居るのに資格なんていらないでしょ？」

家族、そうか、家族か。

異世界で育った俺には家族をバトルに出すという感覚はわからない。でも、コトネと雑巾：マリルの関係が家族だと言っるのは納得できた。

雑談をしている内にワカバタウンの近くまで戻ってきた。潮風の匂いがする草むらを歩いていると、ふと赤い髪の少年のことが頭をよぎる。10時くらいに目撃して今はもう3時すぎだ。あれから姿を見てないけど、また窓に張り付いてたりするんだろうか。

「ねえ、リヨウくんはお夕飯どうするの？」

「ウツギ博士に誘って貰って……」

がしゃーん！と硝子の割れる音に俺たちは立ち止まった。音の出所は前方、町の方。っていうか多分研究所だ。

「今、ガラスの割れる音、したよね？」

「したね。見に行ってみる？」

「うん！」

手早くオタチを戻しながら走り出したコトネを追って俺とマリルも

走りだす。思いの外足の早いコトネとそれに追いついたマリルが町へ着くのと、赤い髪の少年が飛び出してくるのは同時だった。

「きゃっ!？」

「コトネ!」

「ぶぎゅるっ!」

ぶつかりそうになったコトネを突き飛ばして少年は駆けて行く。とっ捕まえることも出来たけど、それじゃストーリーを変えてしまいかねない。なにより転倒したコトネと変な声を上げて潰れたマリルを助け起こすのが先だ。

「ゝいたた、ごめんね、マリル」

「り、りるる…!」

コトネに手を貸して助け起こすと、下敷きになっていたマリルがちよつと涙目になりながら、よろよろ体を起こした。大丈夫?とマリルの無事を確認したコトネはマリルを膝に抱き上げ、むつと顔をしかめた。マリルも同じ顔をしている。

「もう、なんだったのよ、あいつ!」

「りるるゝ!」

「ドロボウ、かな」

「へ!？」

町の入り口から見えるウツギ研究所に目をやると、午前中に少年が張り付いていた窓ガラスが破られている。たった今ワニノコを盗んだところだろう。

「追いかけなきゃ!」

「おいコトネ！怪我は！？」

「してないよ、大丈夫！」

少年を追って草むらへと走り出したコトネたちを追う。手持ちのいない俺は足手まといかも知れないと思ったが、放っておくのも心配だ。

しかし浅いとはいえ草むらって走り辛い。慣れた様子でざかざか進むコトネたちとは少しづつ距離が開いてしまう。おまけに町から離れるほど段差や木々に遮られて、慣れていない俺はますます離れてしまう。あまり離れると野生のポケモンに遭遇した時に困りそうだろうん、虫除けスプレーして走るべきか？でも今鞆なんか漁ってたら見失いそうだ。かと言って草むらをよけられる段差は登れるほど低くないし、結局は鉢合わせしないよう願うしかないか。

四苦八苦しながらいくつもの草むらを抜けて行く。どのくらい走ったのか、いくらローラーシューズ+エアギアみたいなランニングシューズを履いているとは言え息が上がってきた頃。視界を遮る木々を抜けると、草むらに立つ赤毛の少年へコトネが突撃して行く所が見えた。大きく踏み出して突進するように飛びかかって、って、どうやって着地する気だー！！！！

どっ！と追突された少年が宙を舞い、ズザーっと痛そうな音と共に手を着く暇もなく顔面から盛大に着地した。

うひい、痛そう！目の前で見事なタックルを目撃してしまった俺は、初めてのことに思わず足を止めていた。

わあい、初体験おめでとー！と、脳内に的を外れたコメントが浮かんでいる。予想外の出来事に思考が明後日の方を向いていた。

1mは吹っ飛んだ赤毛の少年の近くからコラッタが逃げて行く。ああ、コラッタとバトルしてたから追いつけたのか。ってそうじゃない。

「コトネちゃん！大丈夫か！？」

「くくいつまで乗ってるんだ！」

「きやつ！」

吹っ飛ばした張本人は逃がすまいと泥棒にしがみついていたけど、勢いよく跳ね起きた少年に振り払われてころりと転がる。悲鳴と仕草は可愛いんだけど、さっきのアグレッシブすぎる行動を見た後だと、むしろ泥棒の方が心配かもしれない。顔面から行ったしね。それに女の子って案外強いもんだ。でもさ。

「女の子になにすんだ、この窃盗犯！」

起き上がろうとした体制で停止してしまったコトネに駆け寄る。その間にマリルはコトネを庇って前に出た。

「挫いたか？」

「うー、足首やっちゃったっぽい」

「間抜けな女だな」

靴下の上からじゃわからないけど痛そうだ。でもそれはフンと鼻をならして格好つけた奴も同じ。

「お前も大丈夫か？鼻血でてるけど」

「！」

「また顔面から転ぶなんて、案外トロいんだな」

ぐい、と袖で鼻を拭うが、残念ながらまだまだ鼻血が止まる気配はない。袖がガピガピになる前にティッシュあげたほうがいいかな？

「っ…自信ありそうだな。ちようどいい、お前で試してやるぜ！」

なぜそうなる。俺のどこが自信ありそうに見えたんだ？

「俺ポケモン持ってないけど」

さらつと嘘をつく。実はピジョンがいるけど、出したところでバトルにならないからなあ。レベル高いし大人しいやつだけど、虫避けスプレーを使うために借りたポケモンだから俺の指示には従わない。

「マリルがいるだろう！」

「コトネちゃんのだ。んで当のコトネちゃんはお前のせいで負傷中だ」

コラツタに逃げられてからずっと所在なさにしていたワニノコが、主の顔と俺たちを見比べて困り切っている。

「フンツ！戦えない奴に興味はない」

「あ、待ちなさい！」

「怪我人が無茶すんな」

ワニノコをボールに戻して逃げ出した少年。それを追おうとしたコトネを引き止める。

変わりに一声かけておこうかね。

「通報しとくからな！窃盗犯に傷害犯！」

急いで林の中へ逃げて行く少年を、騒ぎを聞きつけたのかいつの間にか集まっていた数人がぎよっとして見やる。コトネとマリルも同じ表情で俺を見ていた。

「これであいつも暫くは悪いことしないんじゃないかな」

脅しにはなっただろうと笑うと、理解が追いついたらしいコトネは笑った。

「あ、はははは、りよ、リョウくん、あはははっ！周りの人すごいびっくりしてるよ〜」

「あいつと違ってやましくないから大丈夫。

さて、家まで送るよ。はい、負ぶさって」

遠慮するコトネを背負い家で治療し終わった頃には、もう空は茜色に染まり始めていた。

慣れないこと続きだった上にハードな出来事があったせいで、少々2人ともぐったり気味だ。それでもコトネは捻挫した足をテーピングで固定すると、ウツギ研究所へ向かって元気に歩き出した。

「本当に行くのか？家で休んでもいいんだよ」

「ありがと、大丈夫！犯人捕まえられなかったから、せめて報告くらいはしないとね」

俺に任せてしまえばいいのに、真面目と言つか頑固と言つか。

「せめてゆつくり歩けよ」

「りるう」

心配するマリルと俺に、コトネは気丈に笑う。

「だーいじょうぶだって！ちゃんとテーピングしたもん」

「治ったわけじゃないんだからさ。そうだ、無理したらお姫様だったかな」

「え、ええっ！？」

お、赤くなつたら。やっぱり懂れるのかね、お姫様だったって。

「や、むりむりむり。私重いもん！」

「俺の筋力なめてもらっちゃ困るね。今すぐ証明しようか？コトネちゃんくらい軽いって」

「けっこーです！もう、からかつてるでしょ、やめてよねリョウくん！」

冗談めかせたとは言え心配なのは本心だ。今はコトネの頑張りを尊重するけど、辛そうだったら問答無用で抱き上げよう。

ふと見上げた空の端は赤くなり始めていて、唐突に不安がよぎった。ヒビキは無事にライバルと遭遇できただろうか。ライバルは森の中へ踏み行ってしまったが、46番道路の方に行くにはレベル不足だから結局はヨシノシティへ向かうしかないはずだけど、泊まりがけで往復するような距離をヒビキが今日中に帰ってこられるかは解らない。たしかライバルとの遭遇場所はヨシノシティと29番道路の境目、ウツギ博士からの呼び出しで急いで帰宅する道すがらだったよな。

「お邪魔しまーす」

埒もないことを考えている内にウツギ研究所へ到着していた。そしてインターフォンもノックも無しにどうと入ってくコトネとマリルに面喰らってしまった。

あー、そっぴや博士の手伝いしてるんだっけ、第2の家みたいに入り浸ってるのかもしれないな。そうじゃなくても田舎のじいちゃん家みたいに、気付いたら縁側で知らない人が日向ぼっこしてる、なあんで防犯意識もなにもあったもんじゃない風潮なのかもしれない……なんにせよ、こんなだからワニノコ盗まれちゃったんじゃないだろうか。

「ん？」

「あ、警察」

「犯人は現場に戻るといふ……つまり犯人は君！？」

並んだ書棚や機材の奥、ウツギ博士と助手とヒビキを相手に警官が迷推理披露の真っ最中だった。オイオイ、三人ともぼかんとしちゃ

つてるぜ、警察官さんよ。

けれどその空気に気付かないのか、警官はヒビキの腕を掴み連行する気満々だ。

「ちがうわ！犯人は赤毛の男の子よ！」

そこへ割って入ったのは大人じゃなくコトネで、マリルも抗議するようにぴよんぴよん跳ね回る。

「何！？じゃあ君が犯人か！」

ずびしいっと指さされたのは俺。ああうん、赤毛だけどさ。

「いや、俺じゃ」

「話は署で聞こう！」

素早く駆け寄り俺の腕を捕まえ、やっぱりしょっぱく気満々な警官。空気も読めなきゃ話も聞かねえ奴だな！

「ちがうつてば！目つきが悪くて」

「む、悪いな」

うん、つり目なのは認める。

「黒い服着てて」

「服か、どうにでもなるな」

ごもつとも。まあライバルはずっとあの服で通してたけどな。って言うかそろそろ弁解しなきゃ。

「やはり犯人は君！」

「俺も犯人見てるんだけど」

「そりや自分の顔くらい毎朝見てるだろう。身だしなみはエチケツトだからな」

「そうじゃないってば！」

「待って、僕ヨシノシティの近くで犯人に会ってる！」

「またもや割って入ってくれたのは子供のヒビキだった。大人2人は後ろで不安そうに見守ってる。しっかりしようぜ大人！」

「何!？」

「赤毛で目つきが悪くて黒い服を着てワニノコを連れる男の子に30番道路でバトルを挑まれたんだ。背は僕くらいだった」

「私が見たのもその子だわ！」

「コトネちゃんを突き飛ばして逃げたんだ。それにそいつ、午前中にウツギ研究所を覗いてたよ」

「白々と証言に加わる。ヒビキも無事ライバルに会えたみたいだし、疑われちゃ適わないから協力してやろうじゃないの。」

「本当かい、リョウくん！」

「はい。あの時に言っておけばよかったですね。すみません」

「ちょーつと良心が痛むけど、一応事実しか言っていない。つかストーリー変える勇氣はないから報告しなかったって言ったら病院戻されそうだし、ま、細けえ事は気にすんなという事でひとつ。」

「いや、いいんだ、こんなことになるなんて予想できなくて当たり前だ。仕方ないよ」

「ふむ、これだけ目撃証言があればどうにかなりそうだな。他に何

か情報はあるかい？」

「あ、名前見ました。」

「見た？」

「はい、トレーナーカードを落としたから。あいつの名前はシルバ―です」

「シルバー、か。わかった、ご協力ありがとう！では本官はモンタージュを作るのでこれで」

「あ…」

何か言いたそうなウツギ博士に気付かないまま、警官は慌ただしく去っていった。

「被害届け出してないのに…」

「まじっすか」

ヒビキとコトネは意味が解らないようだったが、俺と助手は呆れていた。被害届けがなきゃ捜査してもしようがないだろうに、なんだあの警官。慌てん坊か。

「はあ、大変なことになった…」

「本当に心配ですね。せめて売り払われてなきゃいいんですが…」

「え？」

「売り払う？」

ぎょつとしたヒビキと俺とは違い、コトネとウツギ博士は顔色を変えた。コトネは青ざめたが、博士の顔には何故かシマツタと書いてあった。

「どういう事ですか？」

「いや、ヒビキくんがバトルしたならその心配はないと思うんだけ

どね」

口ごもる博士を2人＋1匹で見つめると、観念したように口を開く。

「君のヒノアラシと盗まれたワニノコ、それから残ったチコリータは貴重種なんだ。絶滅したわけではないけれど、野生は捕獲できない。ポケモン協会からしか手に入らない珍しい種なんだよ」

御三家はどの世代でも通信交換でしか手に入らない、生息域が不明な種だったけどそういう理由があったのか。

「昔はジョウトに多くいたけど、今はいないんだ。だからジョウトでも珍しいし、カントーや他の地方ではもつと珍しい」

ついでに言うなら技も種族値もなかなか良いからな、御三家。それに対人戦なら珍しいというだけでアドバンテージを取れる。所持者が少ないってことは情報が出回っていないってことだ。

情報は重要だ。例えば相手が草タイプだからと炎タイプを繰り出しても、相手が地面タイプの技を出してきて負ける場合がある。もしその草タイプが地面タイプの技を覚えると事前にわかっていれば、地面タイプの技を半減させる木の実をもたせたりと対策を打てるが、それにはまずそのポケモンの情報が出回っているのが前提になる。だから珍しくて情報が十分出回っていないポケモンは勝率が上がる。この世界でそういう、ポケモンのデータベースがどれだけ充実してるかわからないが、攻略本もゲームの解析もない世界だ。俺の世界ほどお手軽に入手できるものじゃないと思う。

となれば御三家の需要はかなりあるはずだ。

「でもヒビクんとバトルしたって事は、もうその子の手持ちだった事だ。その子はトレーナーなんだろう？ならもう自分のIDを登

録しているはずだから、交換は出来ても売り払ったりはできないさ」

その説明で安心した俺と違ってヒビキたちは浮かない顔だ。当たり前だよな、どんな目にあってるか解らないんだから。でもライバル、いや、シルバーはあほの子だけど悪いやつじゃないはずだ。チャンピオンロードまで手持ちを変えた事はなかったし、ウツギ博士も最後にはシルバーを認めてワニノコを譲るらしいな。っていうか俺的には無事ストーリーが進んで一安心です。

今日はもう解散でいいだろう。さつきから片足に重心を寄せているコトネも限界だろうし。

「コトネちゃん、もしかして足辛くないか？」

「んー、実はちょっと辛いかも」

「え？怪我してたのかい！？」

博士がわたたとキャスター付きの椅子を出してくれたけど、もう帰るからとコトネは断った。辛いくせに自力で帰ろうとした怪我人をやや強引に背負い、俺たち二人と一匹は日が落ちかけた外へ出る。ヒビキはお使いが終わってないから居残りだ。

「痛いなら言わなきゃダメだよ、コトネちゃん」「うー…ごめんなさい」

「頑張るのはいいけど、無理もほどにな。」

…しばらくは無理しないようにマリルも見張っててあげるよ？」

「りる！」

まだまだ元気が有り余らせているらしくぴょんぴょん飛び跳ねるマリルが、若干表情を引き締めた。ゲームなら目をキリツとさせた、とメッセージが出そうだが、まんまるボディにくりくり愛らしい目のマリルじゃ迫力ゼロだ。っていうか可愛い。

「うつし、頑張れよマリル。コトネちゃんのボディカード役だから」

「るう?」

「ええ?」

きよとんと見上げたマリルと同じトーンの声をコトネが上げて笑いそうになった。ペットと飼い主は似てくるって言うし、ポケモンとトレーナーもそうなんだろう。そして多分同じ表情なんだろうな。自分の想像で吹き出しそうになったが、努めて顔を引き締める。

「コトネちゃんを守り、お転婆を止める重要な役だぞ」
「りるう!」

わかったとばかりにマリルはひとときわおおきく跳ねた。

「ひどっ!そんなお転婆じゃないよ!?!」
「泥棒にタックルがますような子はお転婆って言っんです」
「りるるりるる」

全くだと言わんばかりにマリルが頷く。まあ当のマリルもやんちゃっぽいんだけどな。

「無理して怪我が悪化しないように見てあげるんだからな」
「りるう!」
「うゝ悔しいけど言い返せないゝ!」

怪我を悪化させたことがあるのか、コトネは背中で唸った。
送り届けて後をやる気満々なマリル任せ、研究所へ引き返す途中。
道の向こうからヒビキが歩いて来るのが見えた。

ひょいと手を上げるとヒビキも同じように手を上げた。

「お疲れさま」

「うん、うん？」

あ、しまった。子供にお疲れ様はないか。

「お使いに泥棒とのバトル、お疲れ様って。ん、あれ？ヒノアラシどうしたんだ？」

ヒノアラシもお疲れ様と言おうとして、ヒビキの足元でなんだかふらふらしているのに気付いた。

「んー？なんだろう、別に毒とかくらってないし…ヒノノ、大丈夫？」

びくつとしたヒノアラシはどこか緩慢な仕草でこっくりと頷いた。
これはもしかただ眠いだけか？

「眠くなっちゃった？」

言いながら抱き上げたヒビキの腕にヒノアラシは大人しく収まる。

「ボールに戻るかい？」

「ひによ」

舌つ足らずに否定したヒノアラシは1日ですいぶん懐いたらしく、甘えるようにヒビキにすり寄った。その背中がぽんぽんと軽く叩かれる。

「抱っこしててあげるからこのまま眠っていいよ」

くありとあくびをしたヒノアラシはヒビキに寄りかかって動かなくなった。元々糸目なので分かり辛いのが、たぶん眠り始めたんだろう。

「いっぱい歩って疲れちゃったんだな」

「初めてのバトルもしたしね」

「今日は2人とも良く眠れそうだな」

「それはリヨウくんもだろ？コトネとマリル、無駄に元気だから疲れたんじゃない？」

遠慮もないけど悪意もない物言い。素直なヒビキに社交辞令は不要だろう。

「泥棒にタツクル仕掛けとは思わなかったよ」

「それで怪我したの!？」

予想外だったらしく酷く驚かれた。

「あゝ、あいつは…」

リヨウくんは大丈夫？」

あんのお馬鹿、と顔に書いてあるのは、心配からくる怒りのためだろう。ヒビキとコトネは仲の良い幼なじみみだから、家族みたいな感覚なのかもしれない。

一応フォロー入れとくか。

「なんともないよ、コトネちゃんが頑張ってくれたからさ。俺がもう少し頼りになればよかったんだけど、ごめんな」

「うつん、コトネの怪我を気遣ってくれただけで十分だよ。あいつ

頑張りすぎるところがあるから、気にかけてくれる人がそばに
だけで頼もしいよ」

…なんたる10歳児。俺が頼りないからコトネに無理させてしまっ
た、不可抗力だと思わせようとしたら、俺が励まされてしまうとは。
ヒビキは度量が広いんだなあ。

「そう言っただけで貰えるとは有り難いよ。なあ、今回のことはあんまり怒
ってやらないでくれないか」

「ん、ん？」

「さらわれたワニノコとポケモンを持たない俺のことを考えたら、
コトネちゃんは頑張らざるおえなかったと思うんだ」

「コトネのことだからただの無鉄砲な気もするけど…」

あはは、確かに戦えるポケモンを持たない俺を置いて突っ走って行
ったあたりは、とても冷静とは言えないだろうな。でも怪我した事
で本人も反省してるだろう。

「ん、わかった。たまには何にも言わない方が、あいつもこたえる
かもだし」

「…失礼かもしれないけど」

「ん？」

「ヒビキくんって、結構しっかりしてるんだな」

お見逸れしました。まさかそこまで考えてるとは。10歳児の思考
とは思えないよ。

「えへへ、もつと褒めていいんだよ？」

「うん、偉いよ。優しいし尊敬するなあ」

「ありがとうー！」

今日は色々あったけど、みんな無事で良かった」

上機嫌のヒビキが言うみんなの中には俺も入ってるんだろう。そう思ったなら自然と笑顔が浮かんだ。

「ほんとだな。そうだ、ヒビキくんは無事にお使い終わったのか？」
「うん。博士に渡してきたよ」

そこでふいと視線が泳ぎ、何かを言い淀んだ。

「何か問題あったのか？」
「ううん、いや、うん。大丈夫、なんでもない。」

吹っ切るように笑うヒビキの悩み事、思い当たらないワケがない。

「ワニノコの事？」

言い当てられるとは思ってなかったのか、きょとんとしたヒビキは心底不思議そうに言った。

「リョウくんってエスパー？」
「エスパーだったら泥棒も取り逃がさないよ」
「そうだね、雑巾みたいに捻れるよね」
「内臓でるまでな。ってそれじゃ俺が犯罪者じゃねえか！」

あははと笑う様子は屈託なくて可愛いのに何故こつも怖い発言できるんだろうか。いや、屈託ないからこそ、この発言なのか？

「あんま気を落とすなよ？」
「んー。わかってるつもりだけど、ワニノコに悪いことしたかなっ

て」

「しょうがないよ、知らなかったんだから。それにまだチャンスはあるはずだ」

「え？」

「なんたつてシルバーはヒビキのライバルだからな。チャンピオンロードまで強制的に腐れ縁だ。」

「なんて言うわけにはいかないのもっともらしい説明をする。」

「知ってるか？ワニノコつて強くなるんだ。強いポケモンを持ったトレーナーは上を目指すと思わないか？」

「…そう言えば弱いやつに興味はないって言ってた。負けた直後に」

「うん、知ってた、知ってたけど吹いてしまった。あああ、ほんとあほの子なんだなシルバー！」

「あほだな」

「あほだった」

「一度しか会ってないヒビキにあほと断言されるライバルつて。グリーンといいシルバーといい、ライバルはアホの法則でもあるんだろうか。」

「まあそんなあほの子が強い力を持ったら目指すだろ、頂点」

「そっか、ポケモンリーグ！」

「そぞ。ヒビキくんも目指すんだろ？」

「うん！あほじゃないけどもちろん」

「にこーっと笑う未来のチャンピオン。どう見ても子犬系でちよつとずれててたまに辛口なあほの子だけど、天才とないとやは紙一重

だつて言つしこれでいいんだろう。

「なら当然必要になるものがある」

「ジムバツジだね。じゃあ旅をしてればまた会つかもしれないんだ」
「そゆこと。さて、そろそろ解散しようか」

ヒビキとはもつと話したい気がしたけど、今日は互いに疲労が濃い。腕の中のヒノアラシなんかすっかり夢の中で、ぴいぴい鼻息が聞こえる。明日から本格的に旅立つわけだし、もう帰って休むべきだろう。

「そうだね、僕も眠くなつてきちゃった。

じゃあまた明日。おやすみ」

「ああ、ゆつくり休めよ。じゃあな」

こうしてまだ旅も始まってないのに波乱すぎる一日は幕を閉じた。

すっかり1日を終えた気分でウツギ研究所へ戻ると、ウツギ博士が1人で待っていた。ちなみにインターフォンを鳴らしたら、大声で入っていいよーと返ってきた。盗みに入られたばかりだというのは防犯意識はないのか、防犯意識は。

「お…えーつと」

とっさにお疲れ様ですと言いそうになって口ごもってしまった。子供らしい挨拶ってなんだ、記憶が遠すぎてわかんねえ。

「お疲れ様、リョウくん。悪いけどもう少し付き合ってもらって良いかい？」

「お疲れ様です。俺なら全然大丈夫ですよ」

結局お疲れ様って言っちゃったよ。悩んだ意味ねえ！。

ちよつと幸先に不安を覚えつつ着いて行くと、御三家のボールがあったマシンの前へと移動した。あれ？確かあほの子盗難事件後ってガラスケースに入れられてるはずじゃなかったっけ。

「本当は明日選んでもらうはずだったんだけどね。この子を貰って欲しい」

「え」

博士がボールを軽く放れば、当然チコリータが出てくる。あ、そっか、俺に渡したら残らないもんな。盗難防止なんざ今更意味ないか。見上げられて咄嗟に笑顔を作ったが、チコリータは澄ました顔で興

味なさにそつぽを向いてしまった。

「最後の一体になってしまったけど、良いポケモンだよ」

「あ、いえ、俺、最初からチコリータを希望してたんで嬉しいんですけど……いいんですか？」

「なにがだい？」

「てつきり俺もお使いがあるのかと」

ゲームならチュートリアル以上の意味はないだろうけど、これは現実だ。適性とか相性とか見なくていいんだろうか。

「ん？ああ、あはははは。ヒビキくんはね、トレーナーとしてまったくの初心者だっただから。君には必要ないだろう？」

とつさにホウオウイベント前後のことを思い出した。明言こそしてはいなかったが、博士は全て承知の上でヒビキに卵を託した人だ。いったい俺の事もどこまで知ってるのやら。……ま、どうでもいいか。何が変わる訳でもなし。

「知識だけですけどね」

「うん、でもそれは大事だ。世話の仕方とかは教わったかい？」

「はい、コトネちゃんがいっしょに教えてくれました」

「じゃあこのボールにトレーナーカードを翳して」

博士はチコリータを戻してボールを差し出してきた。言われた通りにすると、静寂の中でジジ、ジ、と微かな音がした。10秒ほどしてピピ、と電子音が鳴る。もういいよと言われ、俺はトレーナーカードを仕舞いながら疑問を口にした。

「もしかして今ので親IDを変更したんですか？」
「そうだよ」

変更って、親IDの変更は不可なんじゃないのか？

「でも少し間違ってる。変更じゃなくて登録したんだ」
「登録ですか」

はい、と博士がボールを渡してくれた。そのボールを放ると、当然ながらチコリータが出てくる。まだトレーナーになった実感は湧かないけど、自分のポケモンって嬉しいな。自然と顔が緩んでしまう。

「そう。どう言えば良いかな…僕はトレーナーじゃないからね、親IDは持つてないんだ。だからさっきまでのチコリータは、ボールに入ってはいたけど、トレーナーのポケモンと言うよりはペットに近かった。この研究所で飼ってたようなものだよ」

黙って拝聴してる間に足元へチコリータが寄ってきてじつと見つめてくる。意識して取り繕った笑顔を向けたが無反応だ。

「ああ、そうだ。ニックネームをつけるかい？種族名のままでも問題ないけど」

「付けたいです。今すぐじゃないとダメですか？」

「うん、親IDを登録してから5分を過ぎると自動的に種族名になるよ」

タイムリミットあるなんて初耳だ。なんか焦るなあ。

「えっと、あー…そらまめ」

「ちこっ！？」

がん、と本人、本ポケモンって言うのか？あーややこしいな。本人でいいか。本人はかなりショックを受けたっぽい。そうだよな、ゲームじゃないんだから本人の意志も尊重しないとな。

しゃがんでそつと手を伸ばす。警戒はされてるっぽいけど、威嚇されないのをこれ幸いに大きな葉の生えた頭を撫でてみた。おー、植物の葉みたいにつるつとした感触なんだなあ。

気持ち良さそうに目を閉じたチコリータに、次の候補を上げてみる。

「アスパラ」

「ちこっ！？」

ああうん、やだよな。さっきのと大差ねえもんな。あーでも良いのがうかばねえええ。

「ほうれんそ、はっぱ、ようりよく、グリーン、ピース、おひたし、ハーブ、まめこ、みどりこ、まっちゃん、うじちゃん、りよくちゃん、いえもん、あやたか、ティハ」

「ぢっこりいいい！」

「あと3分くらいだよー」

ごるあと言わんばかりに葉っぱでぺしつと手を払われた。全部だめっすか。あーくっそ焦る！

「あらた、しんめ、はっぱたい、まめぞう、にまめ、いりまめ、えんどう、きぬさや、やさえんど、キャベツ、レタス、くさむら、ちこたん、べいたま、めがしやま…うっーん」

「あはは、あと2分だよ」

あまりな候補にチコリータは拗ねてそっぽを向いてしまった。ゲー

△中に使った名前全滅か…

「そらまめ、可愛いと思うんだけど。ダメ？」

「うんとかっこちを見もしない。そらまめ可愛いのかなあ。」

「リョウくん、そのチコリータはメスだよ」

「女の子？珍しいんですね」

撫でようとしたら葉っぱで手を払われた。このままじゃ最悪のファーストコンタクトだ。どうにか挽回せねばなるまい！

「おちゃ、ぐりこ、はなこ、かおるこ、かおり、つぼみ」

ちらつとこっち見た！半眼だったけどこっち見た！可愛い名前がいのか。女の子だもんな。

「ようこ、れいこ、みつこ、はなこ、って二回目か」

「一分きったよ」

「えっ…うっ…」

マズイマズイ、あすばらとそらまめとめがしやまで頭いっぱいになってきた。可愛い名前、可愛い名前だったの！

「えっ…ふたば、わかば、みのり、ふじこ、さくら、なでしこ」

こちらを向いたけれどまだOKは出ない。あかーん、もうむりぽ。

「うっつと、かぐら、ことは、……ほのか……かのこ……はづき……
…わかな」

「ちっこー！」

ぴん、と葉っぱが立ち上がる。

「わかな？わかながいいのか？」

「ちっこー」

頷きを受けて、小さなタッチ画面に急いで入力する。えーっと、わ、わ、『ワ』、『カ』、『ナ』

最後のナを入力した瞬間、おわりを押してないのに画面が切り替わった。

「あつぶなっ！ぎりぎりセーフっ」

とってもタイムボンバーな気分だ。ものすごい達成感。

ちゃんと入力できて良かった。ワカとかでタイムアップしてたらやばかったよ。なんか殿っぽいもんな。

「うし、今日からお前はワカナだ。あ、挨拶まだだったな。俺はリヨウ。今日からよろしくな」

「ちっこ」

葉っぱを揺らして嬉しげに鳴くチコリータをなでようとしたら、葉っぱで手を叩き落とされた。機嫌なおしてくれたんじゃないのか？

「その子は意地っ張りなんだよ。さっき拗ねさせちゃったから、しばらく触れらせないつもりなのかもしれないね」

「そうなんですか。可愛いなあ」

女の子で意地っ張りとか最終兵器彼女すぎる。戦力になって性格的

も可愛いなんて出来すぎだろ。それにツンデレに苦労は付き物だ。デレてくれる日を楽しみにしつつツンを堪能しよう。

「リョウくん、これはヒビキくんにもお願いしてるんだけど、君にも手持ちをなるべく連れ歩って欲しいんだ。」

「はい。研究、ですか」

うつかり研究ですよねと断定しそうになって焦った。知らないふりしとかないとな。

「うん。コトネちゃんがマリルと仲良くしているのを見てね。知ってるかい？ポケモンの中には懐いてないと進化しない種も居るんだ」

わかります、エーフィやブラッキーのことですね。

「モンスターボールが普及する前は連れ歩くのが普通だったと言うし、進化以外にもどんな影響が出るのか興味があるんだ」

「わかりました。」

じゃあ定期的にレポートとか書いた方がいいですか？」

「そうだね。レポート、とまでは言わないけど、知りたいことを表にして渡すから記録してくれるかい」

うーん新システム、いやミッション？ウツギ博士ってポケモン渡したらそれつきり放置で、おまけに研究の結論が「ポケモンとひとのかんけいには おわりがないってことさ！」だったから、思わず作文乙！と突っ込んだものだけど、やる気はちゃんとあったんだなま、研究が実るかは実施するまで判らないのかもしれないし、作文並の結論しかでない場合もあるのかもしれないけど。人同士の関係にだって終わりはないんだからな。

「さ、そろそろ帰ろうか。」

うちの奥さんが夕飯を用意して待ってるからね」

「はい、お邪魔します。あ、そういえばさっきモンスターボールについて聞きそびれちゃいましたけど…」

「モンスターボール？」

いじっぱりチコリータがついて来てる事を確認しつつ、出口に向かいがてら聞いてみた。が、出口についても思い出せないみたいだった。ま、重要でもないからいいんだけど。

5・5 閑話休題、モンスターボールの話（前書き）

モンスターボールの設定説明です。ウツギ博士と主人公がひたすらモンスターボールの仕様について会話してます。読み飛ばして頂いて問題ない話です。

5・5 閑話休題、モンスターボールの話

「えーっと、ボールのIDを書き換えるんじゃなく登録したって…」
「あ、あーあ、あれか。」

あれはね、トレーナーカードが関係してるんだ。どう説明したらいいかな…

まず、ポケモンがどういう原理で捕まるか知ってるかい？」

きい、と軽く開かれた扉の外はすっかり日の暮れて、昼間は心地よかつた潮風が肌寒く感じる。それを気にした風もなく、博士はシャツに白衣だけの軽装でゆったりと歩み出す。

「わかりません」

「ポケモンは弱ると小さくなって物陰に隠れるという習性がある」

「小さくって、もしかしてモンスターボールに入れるくらいですか？」

「そう。その弱った時の本能を利用しているんだ。といつても戦闘程度では小さくならないから、ボールにポケモンを小さくする仕掛けが施してある。そしてその仕掛けはポケモンが小さくなる、というところからヒントを得ている」

外壁にそって設けられたら階段を博士に倣って静かに上がる。上がればすぐに玄関があるが、話の着地点は見えない。あと数十秒で終わるのか、この話。

「さっきポケモンは弱ると小さくなると言っただけど、本来なら肉体を持つものが数倍も小さく縮むことは出来ない。現に人間や他の動物にはまねできない芸等だ。それをなぜポケモンだけができるかと

言つと、ポケモンが自分の体を電子のデータに変換できる生き物だからだよ」

「へええ…あ、だからパソコンでBOXに預けられるんですね」

ゲームではないこの現実の世界で生物をパソコンに送れる、という事実に回答を得られて俺はいたく納得した。いやまあ、生物が電子データに変換されるって前提自体は正直わけわかめだけど、それは聞かないでおこう。もし相対性理論とか量子力学とか論文を引き合に出されても、俺は絶対に理解できないからなあ。

「そう、それは応用だね。

電子情報だから圧縮もできるし元にももどせる。

ただどいくらデータに変換できると言つても、元気な時はデータになる必要がない。小さくなる必要がなきゃ、モンスターボールに入る必要もない。それをボールに入れるためには、データへ変換するように外側から働きかけるなければいけない。だからボールにはそのためのプログラムがプログラミングされているんだ。ちなみに種族事にデータ変換するプログラムは違っているんだよ」

踊場に着いてしまうと博士は此方を振り返った。どうやらここで話してしまうつもりらしい。

「そい言えばコトネちゃんが言つてました。ボールに情報を書き込むことでそのボールにポケモンを拘束するって。もしかしてあの捕獲までの間は、モンスターボールが種族を判別し、それに合ったプログラムでポケモンをデータに変換してる時間、てことですか？」

「そうだね」

うおー、なんというオーバーテクノロジー。

てゆーか、電子のデータになれるって、デジモンみたいだなー。デ

ジモンのが後だけどさ。

「で、捕獲しデータへ変換されたポケモンは、その時にいくつかの抑止力を課せられる。親の言うことを聞くこと、住処がボールになることなかだね。

けれどこの抑止力も含め、データに変換すると言うことは本来なら不自然な事なんだ」

「あの、話を聞いてると、まるで、洗脳、ですね」

ゲームなら気にならない。そう言う仕様だからと思うだけだ。でもこの世界ではポケモンは生きていて、勝手に閉じ込めるのはどうなんだろう。

いや、現実だってペットショップで動物が売り買いされてるけど、うーん…

「うーん、洗脳とは少し違うんだよ。

ポケモンは人よりずっと強い力を持つてる。安全に一緒に居るためにはどうしだって抑止力が必要になる。捕獲は、そのための制約をお願いする行為なんだ」

「お願い、ですか？」

「うん。戦闘によって力を示し、ボールを投げることで制約を頼む。ポケモンはそれを拒んで逃げることもできる。ボールの捕縛率は絶対じゃないだろう？」

なるほど、モンスターボールは猛犬に着ける首輪と鎖代わりで、それを付けて飼われるかどうかの選択の余地はポケモン側にもあるのか。

「さっきの続きだ。ポケモンの本能を利用してボールに収めている

と言ったけど、実は現存するポケモンの半分以上は死にそうになっても縮んだりしないと言われている。この研究は進んでないから仮説にすぎないけど、世代が進むごとに本能が薄れてるのではないかなと言われているんだ。

つまり電子データになれる素質を持つことと実際にデータになることはイコールじゃない」

「あー…例えばいくら野球選手になれる素質があっても必ずなれる保証はない、みたいな感じですか」

自分で言ってもよくわからん。

「ちょっとちがうね。うーん…進化の過程で縮む機能が退化した、と言われているんだよ。

そうだなあ、人が猿から進化したという説は知っているかい？」

猿がペキン原人になりクロマニヨンでホモサピエンスな横スクロール画像が脳裏に浮かぶ。中学の授業だったっけか。つか、ポケモンの世界でも猿いるんだ。

思考は逸れまくりだが頷く。

「人は進化の過程で色々な物が退化していった。わかりやすい例で言えば足だね。猿の足は木を掴むことができるほど器用だけど、人間はできなくなってる。森ではなく大地で暮らすうちに歩くことへ特化した結果、使わなくなった指先の器用さが損なわれたわけだね」
「なるほど」

そっぴや人間の足の小指の関節って人によって数が違うって聞いたことがある。だいたい人は歩くために最低限必要と思われる1つに退化してるけど、たまに2つある人がいるそうだ。

「話を戻すよ。さっき縮む本能が退化したと言ったけど、失われた訳じゃない。人の足が退化しても無くならないようにね。意識して小さくなれないだけだから、外から働きかければ縮むことができる。」

その縮む課程はさつきも少し言っただけど、データになり圧縮されるってことだ。そのデータ化されてる時にボールにデータを取り込み同時にポケモンにも制約を課す。その時、ボールを投げた人のトレーナーカードのIDが主人としてポケモンにもボールにも、変更不可の親IDとして認識される」

なんとなくわかったかなあ。

「だから主人の命令を聞くようになるけど、他人から貰ったポケモンはジムバッジがないと聞かなくなる。」

これは捕獲した時に登録された親IDを持つ人間の言うことを聞くように制約がかけられている事と、盗難防止のために情報の上書きができない事、そしてポケモンの気持ちに起因している」

「気持ち、ですか？」

「うん。今チコリータが拗ねてるように、いくら言うことを聞くように制約がかけられていても、ポケモンにはちゃんと意志がある。捕まる時だってそうだ、戦って自分が認めた人間だからこそ捕まろうと思う。じゃなかったら逃げることでだってできるんだからね」

「ああ、つまり交換した人間の命令は制約だから聞くけど、自分が認めて付いた訳じゃないから、実力がないと判断したら言うことを聞かなくなるんですね」

「そう。そしてその目安となるのがジムバッジだ。ジムバッジには制約のレベルを引き上げるプログラムが組み込んである」

「ん？じゃあバッジを獲得しても、実力を認めて従うって訳じゃないって、制約だから従うだけなんですか？」

「そうとも言い切れないんだよね。バッジがなくても信頼関係が築かれていれば言うこと聞いてくれたりするし、性格によっては認めなくても従ったりする。その逆もあるから難しい質問なんだ」

「ふうん…あくまで目安なんですネ」

「そうだね。さて、ここですうやくトレーナーカードの話に戻るよ。制約をかけるために欠かせない親IDはトレーナーカードに記録されていて、通常は捕獲が成功すると同時に書き込まれる。

ここで問題だ。僕みたいなトレーナーカードを持たない人間は捕獲できると思う？」

「…制約がかかるのが捕獲の途中なら、無理じゃないでしょうか。エラーが起こりそうですね」

「そう、親IDがないと制約がかけられないから必ず失敗してしまう。そこでトレーナーカードとは別に、研究者などに与えられているマスターカードっていうのを使うんだ。トレーナーカードは親IDを記録した身分証明みたいなものだけど、マスターカードは全く違うものなんだ。モンスターボールのプログラムの一部にアクセスしてプログラムをいじれる、言わばマスターキーみたいなものなんだよ。だから目的別に制約の度合いや親IDの登録の不可を設定できる。」

そして今回盗まれたワニノコを含めた3体は君とヒビキくんに渡す予定だったから、親IDの登録を許可していたんだ」

「ああ、それで変更も上書きもできないモンスターボールに親IDを登録できたんですね」

「そういう事だね」

「…ん？あれ？じゃあ、盗まれたワニノコは…」「うーん、そうなんだよねえ…泥棒が交換してくれるとも思えないし、奪えば僕らが泥棒になっちゃうからねえ。困ったね」

軽っ！そんなんでいいのかよ。

「一応、登録を取り消す方法はあるけど、ま、泥棒が捕まってから考えるしかないね」

ふと思ったが、ここまで管理体制が整っているのなら、追跡は可能じゃないだろうか。例えばポケモンセンターを利用したり、ジョウト以外の地域へ行こうとしたなら、どうしたってトレーナーカードを使わなきゃいけない。あ、でも偽造カードを使用している可能性もあるか。うーん、シルバーと言う名前も本名じゃないのかもしれないな。

「とにかく、見かけたらなるべく取り戻す努力はしますね」
「うん、よろしく頼むよ」

俺にストーリーを変える気はない。従って取り戻す気もない。ただ茶番だと思いつつも必要なのだと自分に言い聞かせる。病院に戻る気はないんだ。

ウツギ家にお世話になった翌朝。またいらっしやい、兄ちゃんまたポケモンの話しような！なんて有り難い言葉をいただき、何度も頭を下げながら外へ出た。社交辞令だとしても有り難いよ。

ウツギ博士は一足先に階下の研究所へ出勤している。連れ歩きレポート用のプログラムを準備しているはずだ。

「失礼しまーす。あ、おはようございます」

「はい、おはようございます」

「おはよー。ってなんで敬語？」

「いや、助手さんがいたから」

「ひのー」

「ちこ」

ヒノアラシが短い手をあげ、それに答えるようにチコリータが葉っぱを揺らす。挨拶が終わるとヒノアラシがチコリータを追いかけ始めた。テーブルやイスの間をちまちま抜けて楽しそうだ。

助手がいるのは当然として、ヒビキの存在にちよつとばかり面食らってしまった。トゲピーのタマゴイベントは確かキキョウだ。ここで会うとは思ってなかったよ。

「ヒビキくんはどうしたんだ？ウツギ博士に用事？」

なんかイベントあったっけ？

「うっん、リョウくんに用事。昨日約束したじゃん」

あ、バトルの約束か。そういや今日っただけで、時間も場所も決め

てなかったんだっけ。

「悪い、待たせちゃったな」

「うっん、ちょうど来たところだったよ。タイミングばっちり」

「なら良かった。次からは時間や場所きめとくか」

「そうだね。だったらポケギアの番号交換しようよ」

「おー。そーだな」

記念すべき登録第一トレーナーが主人公かあ。なんか豪勢な気分。手慣れた仕草で登録するヒビキと違い、俺がもたもたしてる間にウツギ博士が奥から顔を出した。

「リョウくん、準備できたよ。おや、ヒビキくんにはノアラシじゃないか、おはよう。」

「そうだ、丁度良かった。2人ともおいで」

二人と二匹でそろそろ奥へ向かうと、ポケギアに記録用プログラムをインストールしてくれた。レベルと種族の欄に幾つかのチェック項目、それから備考欄のついた簡易なものは、その日連れ歩った子の記録をするものだ。因みにデータを送るのは週一間隔で良いらしい。ここで驚きの事実が発覚した。ポケギアにはメールと写メの機能がついていたので。教えてくれてありがとう、ヒビキに博士。ゲームじゃメールつていやボールに付けるものだから、危うく知らずに旅立つ所だったよ。

ウツギ研究所の前、芝が途切れた固い地面の上で俺たちは対峙して

いた。少し離れた場所にはウツギ博士、助手、ウツギ夫人に息子さん、それからコトネにヒビキのお母さんまでいる。バトルを見られるのは恥ずかしいんだけど、ほぼ負けが確定しているから気負いはあまりない。チコリータは頼もしいことにやる気十分で頭の葉をぶんぶん振り回し、レベルでも相性でも有利なヒノアラシの方がちよつと引け腰だった。研究所仲間とバトルすることへの戸惑いか、ウツギ研究所でのチコリータとヒノアラシの力関係か。引つ込み思案なほど照れ屋のヒノアラシはどっちも、いじっぱりチコリータは後者だろうか。

なんて考えてる俺もチコリータには逆らえていない。用意した朝ご飯は食べてくれたしバトルに出してくれるあたり決定的に嫌われたわけじゃないんだろうけど、撫でたり抱き上げたりはさせて貰ってない。少しずつでもいいから距離を縮められるよう、頑張らないとなあ。

ぼんやりしているとウツギ博士の息子さんが一歩前に出た。きらきらした顔で審判を買って出てくれたので頼んだのだ。駆け出し同士の野良試合に審判もなにもないけど、あんなに嬉しそうにされると頼んで良かったと思う。

「ルールは1対1、どちらかが倒れるまで」

張り上げられた幼い声は意外と様になってる。ポケモンバトル番組が好きだと言っていたし、普段からごっこ遊びでもしてるのだろうか。

「準備はいいですか？」

「うん、いいよ」

「いけるか、ワカナ？」

「ちっこー！」

任せとけ！とばかりに威勢のいい返事が響いたのを合図に、少年が手を振り下ろした。

「バトル開始！」

「ワカナ、体当たりだ！」

「こっちも体当たり！」

動き出したチコリータから少しだけ目をそらしてポケギアを確認する。ヒノアラシのレベルは9。火の粉を出されたらひとたまりもなかったが、ひとまずセーフだ。しかし走り出したのはチコリータの方が先だったというのにあつと言う間に距離を詰められて、うまく反応できない間に体当たりされてしまう。やっぱ素早さの種族値はひっくり返せないんだな。

ボールに表示された体力がぐぐつと減り、ほぼ半分持つてかれた。

努力値無振りではほぼ2倍のレベル差があるにしては良く耐えたなあ。

「がんばれワカナ、体当たり仕返してやれ！」

「ちいっこー！」

チコリータの攻撃力はさほど高くないが、防御やHPが低めのヒノアラシ相手なら、急所に2回入れば勝てる、かもしれない。ま、そうそう上手く行くわけないだろうけど。

なんて思ってたら、一発入れられて逆に奮起したらしいチコリータがヒノアラシを吹っ飛ばすほどの体当たりを見せた。軽く中を舞ったヒノアラシにあっけにとられつつもポケギアを確認すると、ヒノアラシの体力は半分近く削れている。いくらヒノアラシの防御とHPが低かろうがこれだけのレベル差だ、たぶん急所に入ったのだろう。

「ナイスワカナ！いいぞ、その調子だ！」

「ヒノノ、体当たり！」

「よけてくれ、ワカナ！」

体当たりの命中率は意外なことに100パーセントじゃない。変なところで外してくれる95パーセントだ。そしてなんと今回は95パーセントクオリティが発動し、見事にチコリータは攻撃をかわしてくれた。この勝負、わからなくなってきたか？

「いいぞ、その調子で体当たりだ！」

「ヒノノ！慌てずに受け止めて、体当たり仕返すんだ！」

かわした勢いを殺さずにチコリータが体当たりを繰り返す。体制を整えたヒノアラシは堂々と正面から受け止めた。そのせいか立て続けに急所という幸運は訪れず、ヒノアラシのHPはイエローゾーンに入っで少しで止まった。急所に入っても削りきれるか微妙なラインだ。急所で乱数一発つてところだろうか。運任せだな。

いや、今はそれよりもう一度攻撃の機会を得るために、再びの95パーセントクオリティを願うのが先だ。なんとという運ゲタイム。

「頼むワカナ、よけてくれ！」

「ひーのっ！」

べち！という音とともにチコリータが転がって、俺は思わず叫んだ。

「ワカナ！」

「…ち、ちこ…」

かろうじて立ち上がったチコリータは、聞いたことがないような弱々しさで鳴いた。これが瀕死か！？とポケギアを見やればリアル襷が発動していた。まさかの残りHP1だ。

まだ終わってない！

「ワカナ、体当たりだ！いけるか？」

「ちっこー！」

馬鹿にすんじゃないわよ！とばかりにチコリータが走り出す。目を見開いたヒビキが慌てて指示を出した。

「煙幕だ、ヒノノ！」

「ひ、の」

いくら素早いヒノアラシでも立て続けに攻撃は繰り出せない。その前にチコリータが体当たりを決める。それを受け止めたヒノアラシのHPがレッドゾーンへ突入する。普通に考えればこのターンでヒノアラシが体当たりを決めておしまいなのだが、ヒビキが命令を訂正する間もなくヒノアラシが煙幕を張ってしまう。

煙幕は命中を1ランク下げる技。この状態だと命中100パーセントの技は75パーセントになる。単純に考えて、今の体当たりの命中率は70パーセントくらいか？低めだけどやるべきことは一つしかない。

「うつすらと影が見えてるところへ、迷わず体当たりするんだ！」

「ちっこー！」

力強くチコリータが大地を蹴りつける。煙幕を抜けて一直線に突っ込んで行く。

しかし聞こえてきたのはヒビキの声だった。

「ヒノノ、体当たりだ」

薄れて行く煙幕の中、どつとぶつかり合うが聞こえた。

ポケギアを確認するまでもない。煙幕が晴れるのを待たずに踏み入ると、薄れゆく煙幕の中でチコリータが倒れていた。

「ワカナ、大丈夫か？」

気絶したらしく返事がない。口元に手をやると息はしている。モンスターボールに戻すのは気が引けて、俺はそっとチコリータを抱き上げた。

「あ、このバトル、ヒビキさんの勝ち！」

少年がヒビキ側の手を上げた。審判頼んだのすっかり忘れてた。

「ありがとう、ヒノノ」

「ひのー」

「リョウくん、チコリータは大丈夫？」

「のびちゃってるけど、これが瀕死状態なんだよな？」

「そうだよ。回復マシンに入らなくても少ししたら気がつくから、そんな顔しなくても大丈夫！」

いつの間にか近くに来ていたコトネが、元氣付けるように明るく笑う。バトルに慣れていないポケモンは瀕死状態になると大抵は気を失うと聞いていたのに、いざ目の前にするとすぐ不安になる。それはヒノアラシも一緒みたいで、ない首を懸命に伸ばしてチコリータの様子をうかがっていた。

「ウツギ博士が回復マシンの準備してくれてるから、行こ？」
「ああ」

ウツギ博士にチコリータたちを任せ、俺たち3人+1匹は研究所の一角を占拠していた。研究員より部外者の数が多いって、よく考えたらとんだ零細研究所だよなあ。

「ヒビキくん」

「ん、なに？」

「バトルしてくれてありがとう。少し度胸がついた気がするよ」

ヒビキは人好きのする笑顔を見せる。

「どういたしまして。楽しかったよ！」

「俺もだよ。ほぼ体当たりの応酬だったのにな」

「そうなんだけど、すごいハラハラしたよ！リョウくんもワカナも初バトルだなんて思えないほど堂々としてたからかな？」

俺は中身と外見の年齢が釣り合っていないからそう見えるんだろうが、チコリータは意地っ張りだから弱みを見せないようにしたんじゃないだろうか。わかんないけど。

「ありがとう。でも勝負がいいとこまでいったのは手加減してもらったからだよ」

最初に火の粉を使われてたら一撃で勝負が決まっていた。炎技は草タイプのチコリータにとって弱点だからダメージ2倍、技とポケモンのタイプが一致するとダメージは1.5倍。ヒノアラシと火の粉は炎タイプだから、つまりダメージは3倍になって、しか

も命中率は100パーセントだ。勝てる訳がない。

「え？手加減なんかしてないよ？」

「え？だって火の粉使わなかっただろ？」

「ひのこ？覚えてないよ？」

「まじで？」

「まじまじ」

…そういやさつき煙幕使ってたな。

「もしかしてヒノアラシが6レベルで覚えたの、煙幕？」

「うん、そーだよ」

「リヨウくん、なにか勘違いしてたみたいね」

「そうみたい」

チコリータがレベル6で覚えるのは葉っぱカッターだ。てっきりヒノアラシも火の粉覚えてるとばかり…

なんとなく御三家は技を覚えるレベルとかその威力とか一緒だと思いついてたけど、よくよく考えたら進化のレベルとか違うし、同じレベルで同じような技を覚えるわけではないんだな。バトル中で焦りがあつたとは言え、うわあ、ハズカシイ。

「ねえ、リヨウくんってどのレベルで技を覚えるとか把握してるの？」

「いや全然。自分が興味ある奴だけ、なんとなく知ってる程度」

初代からの復帰組である俺は『性別？ニドラ[♂]だけじゃないの？性格？なにそれ萌要素？特性？いまいちわからん。努力値？あー、なんか不思議な飴とかでレベル上げるよりちゃんと経験値入れた方が強くなるって噂があつたなあ』な人だったのでネットで調べまく

った。ついでにバトルフロンティアやバトレボにも手を出し始めて、結果、自分が気になったポケモンの種族値や技をなんとなく把握するに至ったわけで。

「すごいね、僕さっぱりだよ」

「やっぱりリョウくんって勉強家なのね」

「そう？ありがとう」

ただの廃人（初級レベル）です。という言葉は飲み込んで、素直に誉められておく。ヒビキとコトネは純粋に誉めてくれてるだろうからな。

「常識に疎いからわからないんだけど、技習得のレベルとか種族値ってあんまり知られてないの？」

「種族値ってなに？」

しまった、もしかして概念そのものがないのか？
焦る俺とは対照的にのほほんと聞き返すヒビキ。言葉に詰まった俺に苦笑いのコトネが助け船を出してくれた。

「新米トレーナーの間ではあんまり知られてないと思うよ。ポケモン塾に通ってたなら別だけど」

よかった、知られてはいるんだな。しかしポケモン塾って何教えてるのか謎だったけど、そう言うこと教えてるのか。

「ま、実地で覚えるのが一番身につくだろうし、数値化されたものがすべてじゃないよな」

「そうよ！知識が全部じゃないの。ポケモンは生きてるんだもの、数値だけじゃわからないのよ！」

「りるりるる！」

ぐっと拳をにぎったコトネは、まるで水を得た魚のように力説した。マリルもびよんぴよん飛び回る。やけに力が入ってて口を挟めない雰囲気だ。廃人となにかあったのか？

見慣れた風景なのか、ヒビキは苦笑気味にそれを見ている。

「リヨウくん！」

「りる！」

「はい？」

あまりの力のこもり具合に、思わず姿勢を正してしまった。仰け反らなかった事を誉めてほしいくらい熱意がほとばしってる。

「私、リヨウくんを応援するわ！バトルの知識を持つこととポケモンを大事にすることは両立できるよね！」

うん、あの、えーっと…

「そうだね、やっぱり信頼関係がないとダメだと思うよ」

「だよね！愛情を持って育てれば自然と応えてくれるものだよね！じゃなきゃ弱いって言われてたポケモンがチャンピオンの手持ちなワケないもの」

「りるっ」

弱いポケモン？HGSSのチャンピオンってチートドラゴン使いのワタルのはずだけど…

「レッドさんのピカチュウとグリーンさんのイーブイ、本当に強いよな。ポケモンのレベルの高さとトレーナーの腕前はもちろんだけ

ど、あそこまで実力を発揮できるのは信頼関係があつてこそだつて思ふよね」

「そーだよねヒビキくん！」

きらきらと瞳を輝かせた幼なじみーズがガシツと手を握り合つて、ねーっと小首を傾げ合う。その周りをマリルが跳ね回る。仲良きことは美しきかな。いや、どっちかってーと可愛い。子犬が3匹じゃれ合つてゐたいだ。

つつかチャンピオンつて前と前々チャンピオンの事か。まあドラゴン族は全体的に優秀だから弱いわけないもんな。

「グリーンつてイーブイ使つてたっけ？」

「え？知らないの？」

コトネは心底驚いたらしく瞳がこぼれそうだ。ヒビキも驚いたようだけど、すぐにいつものこにこ笑顔に戻ると説明してくれた。

「そうだよ、グリーンさんとレッドさんは最初のポケモンを進化させてないんだ。イーブイは進化するとステータスが変わるから、イーブイ用に調整したステータスで進化させるよりそのままにすることを選んだんだつて」

「へええ…そのイーブイの性格と特性つてわかる？」

「覚えてる？」

「んーつとね、たしか、陽気な性格で、適応力だと思つけど」

イーブイは特攻より攻撃が高く、陽気は素早さが上がつて特攻が下がる性格だ。適応力はポケモンのタイプと技タイプが一致してる場合に威力が2倍になる特性だ。だから素早さと攻撃に努力値を振つて強化したんだろう。努力値は進化しても受け継がれるから、進化先は限られる。

初代のイーブイの進化先のうちシャワーズとサンダースは特攻が高めなので特殊技向きのステータスだから却下。唯一攻撃が高く物理技向きのブースターは素早さが低い上に低威力の物理技しか覚えない。イーブイだって素早くはないが、じたばたや恩返しをタイプ一致で撃てるのは強みだ。

…ん？初代ってじたばたと恩返しあつたっけ？つうか特性なかったよな？性格もなかったよな？

世代を重ねるほどに変更されてきたゲームの仕様がどんな風に反映されてるのかわからない。そういう知識をどこまで出していいのか訊ねあぐねているとウツギ博士から声がかかった。回復が終わったらしい。

「いけない！けっこう話し込んでしまった。私そろそろ行くね！」

「うん、いつてらっしゃい」

「いつてきまーす。2人とも頑張つてね！」

「りる〜」

楽しそうなコトネとマリルは跳ねるように研究所を出て行く。元気いっぱいだ。あれが若さというものだろうか。

なんとなく公園のベンチでお孫さんを眺めてるご高齢者さんな気分になりつつ博士の元へ向かう。御三家のボールが置かれていた装置が回復マシンでもあり、今はチコリータとヒノアラシが乗っていた。

「ひの〜」

「おかえり」

ヒビキは足にすりよるヒノアラシを撫でた。俺はとりあえずチコリータに視線を合わせようとしやがむ。そつばを向かれてしまった。でも今までと違って、ツンケンと言うより元気がない感じだ。

「おかえり、ワカナ。痛いところとか、疲れたとかないか？」

「ぶるぶると首を振るけど、心なしか頭の葉がしょげてるような…」

「本当に大丈夫か？具合悪くないか？」

「やはりぶるぶると首を振って否定するものの威勢が悪すぎる。そつと頭や背中を撫でてみてもされるがまだ。うん、間違いなくしょげてるね。負けたのがそんなにシヨックだったのか？」

「ワカナ、大丈夫？」

「たぶんだけど、さっきの勝負が堪えてるのかも」

「ひのの」

「ぺちっ」

「「あ」」

チコリータの顔を覗き込んだヒノアラシは頭の葉でぺしりと打たれてしまった。軽くだったので痛くはないだろうが、びっくりしたのかヒノアラシは尻餅をついてしまっている。それに向かってちっこ！と一声鳴いて、チコリータはずんずん歩き出してしまった。って俺を置いて行くなよ！

「うわ、ごめんな、ヒノノ」

「ひのー」

大丈夫だよ、と言うように片手を上げて鳴いたヒノアラシに、気にした様子はない。慣れてんのかなー。

「ワカナ、ちょっと待って、一人で行っちゃだめだよ」

「あはは。負けた相手に心配されたのが悔しかったのかもね」

のほほんと笑うウツギ博士をチコリータが振り返って睨んだ。図星だったんだな。

「ウツギ博士、色々とお世話になりました。慌ただしくてすみませんけど、出発します」

「どういたしまして。気を付けて行ってくるんだよ、リョウくん」

「はい、ありがとうございます。ヒビキくんもまたな！」

「うん、またね」

研究所の出入り口を開けられずにぷりぷりしてるチコリータの元へ急ぐと、はよ開けれ！とばかりに俺を見上げて来た。はいはいただいま喜んで！

可愛い花の薫る町、ヨシノシティ 1

チコリータは意気揚々と進む。時折立ち止まっては段差を飛び降りてみたり、草むらでごろごろしたり、木に止まった虫を眺めたりと興味の赴くままに行動している。立ち止まったチコリータの隣に立てば、そこには必ず発見があった。

「どうした、ワカナ？」

「ちこ」

道の端、木々の合間を覗いていたチコリータは、視線の先へ首もとから蔓を伸ばした。緑の葉と赤茶の蔦が絡む茂みから出てきた蔓の先には、赤く小さな木の実がある。

「いいもん見つけたな、木苺かな？」

「ちこー」

ふんふん匂いをかいだチコリータはそれを俺に差し出してきた。

「え？くれるの？」

「ちこっ」

あれ？ものくれるようになるのって、もつと懐き度が上がってからじゃなかったっけ？しかも木苺なんてなかったよな。つつかまず木苺の存在にびっくりだ。苺モチーフの木の実あるから、てっきり存在しないのかと思ってた。

「ちこー」

「ありがとう、ワカナ」

「ちこっ」

頷いたチコリータから木苺を受け取って頭をなでると、チコリータはむず痒そうにして、また蔓を伸ばした。

別に急ぎの旅じゃない。それに29番道路は迷うような場所じゃないし、トレーナーもいないからのんびりしても問題ないな。

そう思っただけでチコリータの隣にしゃがんでいたら、両手に小山ができるほど集まった。大収穫だ。今日のおやつだな。ホクホクした気分だ。木苺の小山を見ると、チコリータは物言いたげな視線を寄越してきた。

「なに？　どうかしたか？」

「ちーちこ」

何を訴えているのかさっぱりわからない。疑問符ばかり浮かべる俺に向かってチコリータは何度も鳴いて、通じないとわかるとむっとした顔でずんずん進み始めてしまった。って待ってくれ、両手が塞がってちゃ歩き辛いだろ！

「ワカナ、ちょっとまって…　ってうわっ！？」

やせいのポツポが　とびだしてきた！

リヨウは　きいちごを　おとしそうに　なった！

少し離れた草むらから飛び上がってホバリングするポツポに、思わず脳内でテロップが流れた。アップネ、せっかくチコリータがくれたものを落つことすこだったよ。ってこのまま戦闘に入るのかよ！？

「ちこっ」

「ワカナ！」

こちらが驚いて硬直していてもポツポは待つちゃくれない。体当たりされたチコリータはころりと転がった。わああまずいまずい！飛行タイプとかやばい！ウチのチコリータさんは若葉マークピッカピカの5レベルですよ！うっかりで死ねる！

「大丈夫か、ワカナ！？」

「ちこっ」

すぐに立ち上がったチコリータの頭の葉が、気合いを入れるように一回転した。よし、大丈夫だな？

「体当たり仕返してやれ！」

「ちこっ！」

草むらを揺らしながら低空をホバリングするポツポに、チコリータは勢い良く突っ込んで行く。レベル5では一撃で仕留められるわけもなく、空中で体制を立て直したポツポがまた突っ込んでくる。両手が塞がってるせいで相手のレベルもHPも確認できないのが怖い。素早く立ち上がったチコリータの様子からするに、こちらにはあまりダメージ入ってないと思うけど。

「もう一度体当たり！」

「ちこっ」

バシッと軽快な音がして、ポツポが地に落ちる。こちらを睨みつける目はやる気に満ちているが、襲ってくる様子はない。

何だろう？ポツポって気合い溜めとか覚ええないよな？

指示を仰ぐようにチコリータが少しだけこちらを見るけど、戦意のない相手を倒すのはなあ…いや、そんなこと言ったらレベル上げ

できないか？

考え事をしている内に、草むらからポツポがもう一体でてきた。すわダブルバトルか！？と焦ったものの、入れ替わりで最初のポツポが下がって行く。

なにこれ、無限沸き？ポケモンはそういうシステムじゃないだろー？わけわかんねえ。

「よし。ワカナ、逃げるぞ！」

「ちこっ！？」

「行くぞー」

とりあえず今は逃走しとけ！

ポツポとエンカウントした場所から少し離れた草むら。羽音に振り向いたら、さっきの個体らしいポツポが1羽、近くの木に向かって飛んで行くところだった。追撃してくる様子もないので立ち止まり、しゃがんでチコリータの様子を窺う。

「お疲れさま、ワカナ。痛いところないか？」

「ちこー」

少し不満そうなチコリータがぶんぶん頭を振り回す。ジーパン越しにぺちぺち当たって痛い。元気そうでなによりです。

「怪我なくて良かったよ。

でもな、1人で先に行っちゃだめだぞー。この辺はさっきみたいに飛行タイプが出るし、素早いやつもいるから危ないよ」

「ちこっ」

むっとしたチコリータは、自分はそんなに弱くないと言いたそうだ。

「心配なんだよ、だから一緒に行こう？な？」
「……ちこ」

ちよつとまだご機嫌斜めだけど、とりあえず納得してくれたようで
お兄さんは安心しました。

「よし、じゃあこの木苺しまっちゃうから。ちよつと待っててな」
「ちこ！？」

「ん？どうした？今食べたいのか？」
「ちーちこちこちー」

ごめん、さっぱりわからない。

「この辺は危ないし、食べるならせめて草むらを抜けてからにしよう？」
「ちっこ」

ようやく頷いてくれたので、ビニール袋に入れてから鞆にしまう。
ついでにポケギアでステータス確認だ。

「あれ？経験値入ってる」
「ちー？」

わからないとは思っけど、首を傾げるチコリータにポケギアを見せて説明してあげる。

「ここの、この青くなってるバー、経験値って言ってお前がポケモンを倒すたびに増えるんだ。さっきのポツポ、気絶はしてなかったけど倒してみたいだ」

チコリータは説明がわからなかったのか、首を傾げた。

「んーとなあ、これはワカナが頑張ったって証拠なんだよ。有り難うな」

「ちー」

ぱつと顔を輝かせたチコリータを撫でる。拒まれなかったので抱き上げてみようとしたら、ぱん！と頭の葉で手を払われた。痛いです。羽音が聞こえて顔をあげると、さつきエンカウトした場所からまたポツポが飛び立ったところだった。先に飛んで行ったポツポと同じ木の影に入って行く。

ふと、もしかしたらあそこに巣があつて、俺たちが近付いたから襲ってきたのかな、と思った。

「だとしたら、倒したはずなのに睨みつけてきた理由もわかるよな

……」

「ちこ？」

首を傾げたチコリータに何でもない、と言って、俺たちは再びヨシノシティへ向かって歩き出した。

ヨシノシティのポケモンセンター。回復が終わったチコリータはご機嫌だ。草タイプのさかなのか、町中から花が香るヨシノシティをお気に召したらしい。

それに加え連続エンカウトのポツポから逃げた以外は連戦連勝、

レベルも上がって葉っぱカッターを覚えた。気分は上々ってところだろう。

「お疲れさま、ワカナ。遅くなったけどご飯にしようか」

「ちこ！」

ポケモンは基本的にポケモンフードを食べる。人間の飯も食べられるけど、味付けが濃すぎてあまり体に良くないらしい。その辺は動物と変わらないんだな。ウツギ博士が研究所であげていたフードをくれたので、しばらくはそれを食べさせるつもりだ。

ポケモンセンターはゲームで見るよりずっと広くて、アニメみたいに無料の宿泊施設が併設されている。ちらりと覗いた食堂は昼時を過ぎたのにまだ混んでいた。まあ今日はウツギ夫人が持たせてくれたバゲットがある。談話室で空いてるソファを見繕いますか。

「ちょっと待っててな」

席に鞆を置いて、まずはチコリータの前へフードと水を用意してやる。さらにもうひと組準備したフードと水は、借り物のピジョンの分だ。

「おいで、ピジョン」

「ピジョー」

ばさりと伸びをするように翼を広げたピジョンは、さっそくフードをつつき始める。チコリータは気丈に振る舞っているが、苦手なタイプのためか少し緊張してるみたいだ。昨夜も今朝もこんな調子だった。苦笑しながらチコリータを撫でる。

「大丈夫、ピジョンはいいやつだよ」

「ちこつ」

ぷるぷる首を振って手を払いのけたチコリータは気にしてなんかない！と言ってるらしかったが、明らかにピジョンを意識していた。ピジョンは本当に気にしてないようだが、なんだか双方が気の毒に思える。

セラピスト先生から借りたピジョンはすごく大人しいんだけど、レベル差やタイプ相性が心理的圧迫になっているみたいだ。

あまりチコリータを待たせると可哀想なので、考え事を追いやってバケットを取り出す。俺の肩掛け鞆はトレーナー御用達で、なんと自転車まで入る四次元鞆だ。おかげでバケットもふっくらそのまま持ち運べた。

談話室の端に設置してあるレンジを操作して、持参したコップに水を注ぐ。温めたバケットを手に席へ戻ると、チコリータがそわそわしていた。

「よし、じゃあいただきます」

「ちこりー」

俺の後に続いてチコリータもいただきますをした。ポケモンの言語なんてわからないけど、この意識は間違っていないと思う。

「おいしいか？」

「ちこつ」

頭の葉を嬉しげに揺らしながらチコリータは応える。こういう、会話が成り立ってるような返事をするところがとても人間くさい。猫や犬だと食べるのに夢中で、返答はあまり期待できないからなあ。俺も具沢山のバケットを頬張る。鶏肉とチーズがやや重たいけど、トマトの酸味が利いていて食欲が刺激される。お腹もすいてたし、

あつと言う間に2本のバゲットを平らげてしまった。

「満足したか？」

「ちこー」

口の周りを舐めとっているチコリータもご満悦で、体力気力ともに十分のようだ。一足先にピジョンを戻したこともあつてくつろいでる。休憩を挟んだらすぐにでも出発できそうだな。

とはいえ今日中に30番道路を突破するのは難しいだろうなあ。ジョーイさんに聞いた限り、距離的には問題ない。でもあそこはポツポに加えて虫タイプが出るし、トレーナーも待ち構えてるはずだ。もたついて夜にさしかかれば危険はさらに増す。夜は視界が利き辛くなると教わったし、体力だって無限にあるわけじゃない。

どの道この先は草タイプのチコリータには少々荷が重い場所だ、慎重に行かなきゃだめだろう。2倍以上のレベル差があれば危なげなく行けるんだけど、あいにくチコリータのレベルは7。まだまだ心許ない。うーん、最初のジムは飛行タイプだし、戦力を強化した方がいいんだよな。でもむやみに増やしたくない。

一応チコリータの他にも手持ちが居るにはいるけど借り物だ。セラピスト先生に無断でバトルするわけには行かない。っていうかそれ以前にまず言うこと聞かないしな。

片付けをしながら今後について考えるが答えはでない。

ま、そういう時は出来ることから片付けるべきだよな。

「ワカナ、午後はちょっと寄り道するよ」

「ちこ？」

首を傾げたチコリータを撫でる。今朝のヒビキとのバトルからチコリータは俺を受け入れ始めてくれてるようだ。ざまざま瀕死にさせるようなことは避けたいな。

「今から次の町はちょっと辛いから、フレンドリーショップに行つて寄り道して、今日はここにお泊まりしような」

わかつているのかいないのか。首を傾げたチコリータを連れて俺はポケモンセンターを後にした。

フレンドリーショップへ向かう途中、問答無用で案内爺さんに捕まった。ゲームではランニングシューズをくれるありがたい爺さんなんだけど、すっかり忘れていたからすごく驚いた。しかももうランニングシューズ持つてるし。

「付き合ってくれたお礼にランニングシューズをあげよう。わしのぬぎたてホヤホヤじゃ」

「わーありがとうございます！ほんのり生温い暖かくて微妙な気分になれますね！」

「む、なかなかやるな少年。そんな少年にはこれもおまけじゃ」

ボケにボケを被せたらなんかの木の実くれた。チコリータが興味津々なのでしゃがんで見せてやると、ふんふん匂いを嗅ぐ。食べたりすんなよー？

「ありがとうございます。じゃ、おまけだけありがたく」

「ほっほっほ、ちゃんと新品のランニングシューズも用意してあるよ」

「すみません、実はもう持つてるんです」

「なんと！ただで爺に付き合うとは良い心がけじゃ。どれ、ランニングシューズの代わりになるかはわからんが、これも持つておゆきなさい」

「ありがとうございます、助かります」

さらに木の実を貰ったけど何かはわからない。さすがに木の実の外見なんて少ししか覚えてないよ。うーん、スターとかカムラじゃないのは確かなんだけど、どこかで調べないとなあ。

ポケモン大事に頑張れよと見送ってくれた案内じいさんに手を振り返し、今度こそフレンドリーショップへ。ポケモンセンターに入った時もだったけど、初めての場所に興奮気味のチコリータはきよるきよるしてる。

「ワカナはフレンドリーショップ初めてか？」

こくこく頷くものの視線は棚に釘付けた。聞いてるかわからない。一応説明はしとくか。

「ここはお金と物を交換するところだから、買わないものはさわっちゃだめだよ」

「ちこ」

首を傾げたチコリータに言い聞かせる。

「今日は美味しい水と手みやげを見に來ただけだから、それ以外は手にとっちゃだめ。わかった？」

「ちこー」

生活雑貨も自分で賄わなきゃいけないから財政は厳しい。傷薬はい

くつか博士に貰ったけど、回復量20で300円の傷薬と50で200円の美味しい水（人間も飲用可）だったら、後者を求めるのは当たり前だろう。

「ワカナ、はぐれないように手を繋ごうか」

「ちこ？」

「蔓だして」

「ちー？」

首を傾げながらチコリータは、首の両端から蔓を伸ばす。

「片方だけでいいよ、右だけ」

右首から伸びる蔓を軽く握る。手を繋ぐっていうか、犬のリードみたいになってしまった。

「こうしてたら、お互い迷子にならないだろう？」

「：ちー」

「あいてっ」

べしんと蔓で手を叩かれた。手加減されても蔓の鞭は痛いよ。縄跳びに失敗してすねとかにぶつけたみたいなの痛さがある。

「手繋ぐの嫌なら、はぐれないよう気を付けような」

「ちこっ」

フレンドリーショップが初めてなのは俺も一緒。2人でひとしきり店内を回って、最後にポケモン印の菓子棚の前で足を止めた。

「24枚入りでいいかなあ」

大きめの箱を手にとると、チコリータが蔓でつんと手を引いてきた。

「なんだ？」

「ちこー」

クッキーを持つ手を軽く引かれて、ようやく見せてくれと言っ
てることに気付いた。

「見たいのか？」

「ちこっ！」

「いいけどお前、好みは辛いやつだろ？これ甘いやつだよ」

意地っ張りな性格のポケモンは辛い味を好む。そこはゲームと変わ
りない。実際、わけてもらったフードも辛い味だ。
しゃがんで差し出してやると、匂いを嗅いで首を傾げた。

「はは、パッケージの上からじゃ匂いなんてわかんないだろー」
「ちー」

まだ首を傾げてるチコリータに柵から違う菓子を取ってあげる。1
00円くらいなら無駄使いしてもいいだろう。

「ワカナはこっち、辛いやつな」

「ちこ？」

「これはお前のおやつってこと。ほれ、持ってくれ」

首の両端から伸びる蔓で抱えたのを確認してレジへ向かう。店員の
後ろに見える壁掛け時計は、すでに3時半を回ってる。ゆっくりし
すぎたみたいだ。急いで行きますかね。

緩やかに曲線を描きながら森の合間を貫く道は、整備されていて野生のポケモンはでない。コンクリートの道が珍しいのか、チコリータはしきりに足元を気にしながら歩いていった。この道はヨシノ総合病院へと、俺が昨日まで入院していた場所へ続いている。

隔離されるような立地なのは精神科の隔離病棟があるゆえなのかとか、昨日の今日だけドイーブイは元気かなとか、貧乏とはいえ手土産がやすいお菓子ってマズったかな、なんて考えてるうちに着いてしまった。

広大な庭を持つ大きな病院は、白くて綺麗で開放感がある。けどその周りは生け垣や高い柵で囲われていて、どこか息苦しい。ただ建物を見上げてぽかんと口を開けるチコリータを見るにつけ、たぶん収容されたことがある者だけの感想なんだろうけど。

「ワカナ、ここじゃはぐれたり騒がないように気を付けるんだよ」

「ちこ？」

「ここは病院だから、具合が悪くて入院してる人がいる。そういう人に迷惑をかけちゃだめだ」

すぐ頷いてくれると思ったのに、チコリータはただ俺を見つめるだけだった。

「ワカナ？わからなかったか？」

「ちーちこちこ、ちこー」

うんごめんわかんない。どう説明したもんかと悩んでいると、チコリータは蔓をのばして俺の手を引っ張った。ちびっこいクセになかなか力が強くて、たたらをふんでしまう。

「とつとつとつ、危ない危ないって、ワカナ！」
「ちーこー」

ぐいぐいと力を込めて引つ張るチコリータの力に逆らいきれない。
「すげーパワーだな！」

「まってまって、転んじゃうよ！」
「ちこっ」

はっとしたチコリータは引つ張るのを止めた。でも蔓は絡んだままだ。

「いきなりどうした？病院が怖いのか？」

「ちこ」

「怖い人でもいたか？」

「ちこ」

どちらの問いも答えはNOで、弱ってしまった。なんでそんなに嫌がるんだ？

「大丈夫、ここはワカナの嫌がるようなことをする場所じゃないよ」
「ちーちこ？」

不安そうに見つめられても困惑が募るだけだ。何がそんなに不安がらせているんだろう？

「嫌ならボールに入ってくればいいよ」
「ちこー！」

「うおっ」

ぶんぶんと首を振ったチコリータは、今度はぺたりとくっ付いて来た。なんだよ、かわいいな。

「どうしたんだよ、ワカナ？」

「どしたんだい？」

突然の第三者の声に思いっきり肩が跳ねた。ポケモンに話しかけるとこ見られた！はっず！

「いや、ちよつと病院に用事なんですけど」

「ん？君は昨日出発した子じゃないか？」

「え？あ、昨日の警備員さん！」

振り向いた先で優しげに笑う、年配にさしかかった警備員には見覚えがあった。昨日の朝、門に詰めていて先生たちと一緒に見送ってくれた人だ。

「なにがあつたんだい？」

ほつと安心するような笑みの警備員を見上げ、チコリータは動きを止めた。今なら簡単にボールに戻せるけど、このままボールに戻すのは良くないだろう。

「先生にお借りしたピジョンを返しにきたんですけど、ワカナがむずがっちゃって」

「そうなのかい。ワカナちゃんは病院は嫌いかい？」

病院好きなやつなんて相当な物好きだけだろー。と内心つつこんだ

が、チコリータは首を振った。物好きさんだったのか。

「お兄さんはここに用事があるんだって。入るのが嫌ならおじさんと待ってるかい？」

「ちこ…」

チコリータは首をふって、俺をつかむ蔓に少し力を入れた。警備員が微笑ましそうに笑う。

「大丈夫だよ、ここはお兄さんに痛いことをするところじゃないからね」

「ちこ？」

「本当だよ。お兄さんは借りたポケモンを返しにきただけなんだって」

会話が成立したことにあっけに取られていたが、チコリータが不安そうに見上げてきたので慌てて肯定する。

「そう、ピジョンを返しに來ただけだよ。ピジョンはこの先生から借りていたから」

「ちっこ」

ほっとした様子でするすると蔓を収納していくのに、思わずおじさんをまじまじと見つめてしまった。

「よくわかりましたね？」

「ははは、トレーナー歴だけならもう30年になるからねえ」

継続は力なりって言うけど、なかなかこんな風にはなれないような気がする。初対面のポケモンの気持ちを探るなんてエスパーみた

いだ。そついやこの世界つてエスパーいるんだっけ。えーとなんだっけ、心読むのって…

「サイコメトリ？」

「ん？ああ、ははは。私は超能力者なんかじゃないよ。さ、ワカナちゃんも納得したみたいだし、中に入りなさい」

「ありがとうございます。行こうか、ワカナ」

「ちっこ」

俺の隣にちよこんと座ったチコリータは、きよろきよろと視線を移していた。受付前の広い待合所は午後の診察ぶんの人で溢れているから、田舎の研究所育ちには珍しい光景として映っているのだろう。名前を呼ばれたのでチコリータを伴って奥へ進む。

「ワカナ、歩きづらくないか？抱っこしようか？」

「ちーちこ」

人が多いので抱っこしようとしたら嫌がられた。ちえっ。

エレベーターや廊下ですれ違う人に、チコリータが忙しなく首を回す。ここの精神科はジョウトで一番大きく、ベッド数もさることながら最新の治療法を求めて通院する人も多い。だから必然的に院内は人で溢れているのだ。

通されたのは診察室じゃなく、ポケモンセラピストの先生達の準備室。そこには一人の先生と一匹のイーブイだけが居た。他の先生やポケモンたちは出払っているのだろうか。

「一昨日ぶりです、先生、イーブイ」
「ぶいー」

ふかふかの尾をふりふりと振りながら、イーブイが足にすり寄る。しゃがんで撫でると相変わらずの人懐っこさで喉を鳴らした。

「いらつしゃい、順調に行ってるみたいだね？」

「はい。ワカナ、この人はこの病院の先生だよ」

セラピストをどう説明したら解ってもらえるのか。それが解らなくていい加減な説明をすると、先生は笑い声をあげた。

「先生だなんて大げさな。僕はここで退屈してる人の話し相手だよ。いらつしゃい、ワカナちゃん。お茶でも飲むかい？」

「ちこりー」

ぴんと葉っぱを立てて挨拶する。お行儀がいいねと笑って、先生はローズヒップのハーブティーを出してくれた。

「ピジョン、ありがとうございます」

「どういたしまして。お帰り、ピジョン」

「ぴじょー」

モンスターボールから出たピジョンはぱりと羽を伸ばすと、先生の隣へ寄り添った。先生がカキカキと喉を掻いてやる。

「ぞうぞ、これみんなで食べてください」

「おや、ありがとう。でも次からはこんな気遣いはいらないよ、もっと気軽に訪ねておいで」

クッキーの詰め合わせをにこにこ受け取ってくれた先生は、早速封をきり、棚から取り出した饅頭や煎餅とともに勧めてくれた。アンバランスだけどせっかく出してくれたものだ。一つくらい手をつけるのが礼儀だろう。チコリータのために煎餅を砕いてあげてから、自分の分の饅頭を取る。と、イーブイが俺の手にじゃれついてきた。くれとねだっているのだ。

「あげてもいいですか？」

「かまわないよ」

一応聞いてみればすぐに肯定が返る。この部屋にあるものは大抵がポケモンも食べられるものだし、俺が持ってきたクッキーも同じだ。千切った饅頭を手のひらに載せて差し出すと、イーブイはさりさりと舐めるように口にした。少し手のひらがくすぐったい。その様子を見詰めていたチコリータにも千切って差し出す。

「はい、ワカナもどうぞ」

「ちこ…」

ふんふんと匂いを嗅いだが、微妙な表情ですぐに首を引っ込めてしまふ。

「饅頭は嫌いかな？」

「ちこ」

首を振って否定はしたが、口にしようとはしない。すると自分のぶんを食べ終えたイーブイが、膝に乗り上げて俺の手を引いた。食いしん坊だ。

チコリータがいないなら、とイーブイに差し出す。チコリータはテーブルに飛び移ってお茶を口にした。そっちが良かったのか。

「そんなに順調でもないようだね？」

「え？」

「ワカナちゃん、拗ねてるみたいだよ」

「え、え？」

疑問符を浮かべた俺に先生は苦笑した。

「ワカナちゃんは意地っ張りなんじゃないかな？」

「えーと、そう言うのって見ただけでわかるもんですか？」

警備員といい先生といい、なぜこうも言い当てられるんだ？

「今回はね、わかりやすいから。君がポケモンに慣れてないのはわかるけど、大切にしていけないと」

大切、かあ。

「無碍にしてるつもりはないんですが…」

「簡単だよ、もっと構ってあげればいい。ワカナちゃんは君のパートナーだろう？」

「はい」

構う、構うね。って言っても抱っこや撫で回されるのは好きじゃないみたいだし、構い過ぎて嫌われたら本末転倒だよな。

「ワカナ、クッキー食べる？これは甘さ控えめだから美味しと思うよ」

とりあえず餌付けだ、とクッキーを割って差し出すけど、こちらを

見向きもしない。イーブイがまた袖を引いた。それを見ていた先生は大笑いしだした。

「あつはつは、どうやらワカナちゃんはイーブイに嫉妬してるみたいだね」

嫉妬？と口に出す前にチコリータが先生に飛びかかって行った。つてコラ！

「ちこー！」

どーんと体当たりしたチコリータを先生は軽く受け止める。

「なにやってんだワカナ！イーブイ、ちょっと降りてくれ」

「ぶいー」

「いいんだよ、リョウくん」

「ちこーっ！」

ひょいとイーブイをのけて、葉っぱでぺちぺち先生を叩くチコリータを持ち上げる。

「だめだろ、先生叩いちゃ」

「ちこーっ！」

「あいたっ」

ぺーんとほっぺを叩かれた。結構痛かったぞ！

「ワカナ、暴れるなって、落ちちやうって、ああー」

べちつと、落下とも着地ともつかない音を立てて床に降りたチコリ

「タは、距離を取ると俺に向かって威嚇した。

「ワカナ？」

「ちーっ！」

困惑して問いかけたが、ぶんぶかぶんぶか、頭の葉っぱを振り回しながらの威嚇が返答だった。当たったらなかなか痛そうなスピードだ。

「なに何怒ってるんだよ？」

「ちーっ！」

「威嚇されてもわかんないよ」

「ちーこちこっ」

ごめん、説明されてもわからなかった。

どうしたもんかと動きあぐねていると、チコリータはぶいっとそっぽを向いてドアに向かってしまった。が、当然開けられないし開かない。

「ちーちこーっ！」

「だーめだって、まだ帰らないよ。それに病院を1人でうろろしちゃダメだ」

べちつと扉を叩いて催促されたが、まだ開けるわけにはいかない。最初はピジョンを返すことだけが目的だったけど、今は尋ねたいことができてしまった。

「どれ、じゃあ僕と散歩に行こうか」

席を立ったセラピスト先生が、チコリータに目線を合わせるために

しゃがみ込む。

「日向ぼっこするには遅いけど、ここの中庭は緑が溢れてて綺麗なんだ。君も気に入ると思うよ」

ね、と笑う先生にチコリータは頷いた。優しく頭を撫でた先生が、抱っこしようか、と言って抱き上げると、大人しく腕に収まる。直前まであんなにイライラしてたのに……これもトレーナー歴の差なんだろうか。

「ぶいー」

「うお、なに登ってるんだよ？」

微妙にへこんでる俺などお構いなしに、イーブイは器用にズボンを登ってくる。若干爪が刺さって痛いんですけど。落ちないように抱き上げてやれば、イーブイはもぞもぞと動いて居心地の良い体勢で落ち着いた。

「お前も抱っこしてほしかっただけかよ」

答えは満足そうに鳴らされる喉でわかる。本当に人懐こいよなあ。

「しょうがないトレーナーだね、ワカナちゃん」

「あ」

苦笑する先生の腕の中でチコリータが丸まっていた。丸まるなんて覚えないうさー、お前。なんてからかつちゃいけないのはさすがにわかったが、なんつつか後の祭だよな。

デリカシーないんだろうか、俺。うん、たぶんないんだろっうな、俺はもちろん、喉を鳴らし続けるイーブイにも。

緑溢れる中庭に移動するとチコリータは機嫌を少し直したようで、ちまちまと探索し始めた。

「ワカナはその花が好きなのか？」

花壇を覗き込んでいたチコリータは俺を無視して行ってしまう。地味にへこむぞ、これ。

そんな俺に苦笑して先生がチコリータに話しかけると、嬉しそうな返答がある。

「ピンク色が好きなのかい？」

「ちこー」

切ねえー。手持ちに無視されるとか、まして最初のポケモンに無視されるなんて悲しすぎるだろ！

「ぶいー」

のんきに蝶々を追いかけるイーブイが通り過ぎていく。なんか無性にやるせない。

思わず苦笑いしていると、足元へイーブイがやってきた。得意げに喉を鳴らすその口元に、さっきのモンシロチョウさんが。

「う、わーおばかちゃん！虫なんかくわえちゃだめだって！ほら、ぺっ！ぺっしなさい！お前虫なんか食べないだろ！？」

吐き出させるにはどうしたらいいんだ！？蝶の羽って結構脆いから、

無理やり口を開けたらまずいだる。

イーブイの口元に手を持って行った状態で固まってる、イーブイは俺の手にモンシロチョウをおいた。これ幸いとばかりに、慌ててモンシロチョウが飛び立ってゆく。

それを追うでもなくただ俺に向かってにこにこ笑うイーブイは、まったく悪気なくてむしろ得意げだ。

「ぶいー」

もしかこれは、猫とかがやると言う獲物自慢だったんだろうか？

「捕まえたから見せびらかしにきたのか？」

「ぶい」

こつくり頷いたイーブイを撫でてやる。悪気ないんじゃないや強く出れない。

「そうか、見せてくれてありがとうな。でも虫はとっちゃだめだぞ、結構脆いんだからな」

「ぶいー」

聞いているんだか聞いてないんだか、イーブイは撫でられてご満悦の様子。もつとなでれとよじ登ってきたイーブイの口の周りが僅かに白くなっていて、俺は思わずのけぞった。

「こら、やめろっ！お前鱗粉ついてんじゃないや、ぎゃー」

その口を顔に寄せるな、と叫ぶ前にぐりぐり擦り付けられた。

「あーもーお前、ははは、しょうがないなあ」

「ぶーいー」

思わず笑いながら、嫌がるイーブイの口を手で拭って自分の頬も拭う。マイペースでおばかちゃんだけど憎めないんだよなあ。

「きゅっ」

「うえっ!？」

俺の腕から吹っ飛んだイーブイが、鳴きながら空を舞う。突如として体当たりしてきたチコリータに飛ばされたのだ。俺の上に着地したチコリータは俺を蹴りつけ、地面に転がったイーブイへと飛びかかっていった。

「え、ちょ、ワカナさん? いやいや、ダメだって、喧嘩はだめ!」

べっちゃんばっちゃん! 頭の葉でビンタしまくるチコリータを慌てて抱き上げると、イーブイはびっくりして固まっていた。

「大丈夫か、イーブイ?」

「ちこー!」

「いたっ! 痛い痛い、痛いよワカナ」

「ちこちこちこー!」

暴れまくるチコリータを落とさないよう必死に抱えていると、葉っぱだけでなく頭が顎にごちんとクリティカルヒットした。思わずチコリータを抱えたままうずくまる。

言葉もなく悶絶する俺をチコリータが振り返った。

「大丈夫かい、リョウくん?」

「は、はい」

とは言ったものの涙目になつてゐる自信があつた。顎の下なんてモロ人体の急所に不意打ちで入つたのだ、痛くないわけがない。

「ぶいー？」

「大丈夫大丈夫。イーブイは大丈夫か？」
「ぶい」

顎をさすりながら問う。にっこり笑つたイーブイは平氣そうだ。チコリータも本氣じゃなかつたんだろう。当のチコリータはそつぽを向いてしまつたけど、流石にバツがわるそうだ。

「チコリータは大丈夫か？どこも痛くしてないか？」

無言の頷きが返る。取りあえず俺を無視するのは止めてくれたらしい。

「みんな怪我なくて良かったな」
「ぶいー」

一番の被害者だと言つのに、氣にする素振りもなくイーブイが笑う。と、チコリータはちらりとそちらを見やつた。向かい合うよう、チコリータを抱え直す。

「ワカナ」

ぴくつと反応はあつたものの顔を上げない。別に頭ごなしに叱ろつてワケじゃないんだけどな…その意志表示のためにそつと頭を撫でてみる。

「俺がイーブイばかり構うのが嫌だったのか？」
「…ちこ」

小さな声はしよげ返っていた。しょうがない、これは俺が悪かった。

「ごめん。ごめんな、仲直りしてくれるか？」

「ちこ」

「そうか、ありがとうな」

頷いたチコリータをぐしゃりと撫でてから、そつと地面に下ろす。
見上げてくる顔に一つだけ言わなきゃいけない。

「俺はいいけど、イーブイには謝るんだぞ。いきなり喧嘩仕掛けた
んだから」

「ちこっ！？」

ええっ！？とびつくりしたチコリータに、だめだ、喧嘩両成敗。と
言えば、膨れながらもイーブイに向かって鳴いた。

「ちこち」

「ぶいー」

イーブイがチコリータに笑いかける。仲直りはできたみたいだ。

「すみません先生、こんなところで喧嘩はじめちゃって」
「いいよ、青春だねえ。仲良きことは美しきかな」

蚊帳の外だった先生は、なんだかにやにやと見守る体勢だった。その
ことには気付かない振りをしておいた。だってつづいたらやぶ蛇
だろ、絶対。

「ねえ、リョウくん」

「はい？」

「ワカナちゃんとイーブイも仲良くなれたことだし、イーブイを連れて行ってくれないかな」

「え？」

イーブイを連れて行くと、手持ちにすんの？俺はいいよ、イーブイ好きだし、気心知れてるから一緒に行けるのは嬉しい。けどさ、問題あるんだよね。

「俺、交換できるポケモン居ませんよ」

「大丈夫、譲るから」

「や、でも、イーブイは先生のポケモンでしょう？」

「今はね。でもポケモンセラピストはポケモンを譲ることもあるんだよ。ね、イーブイ」

「ぶい」

こつくり頷くイーブイ。ここから出て行ったポケモンを見たことがあるのだろう。

「イーブイは君を気に入ってるし、頼りになるから連れて行ってごらん」

「ええと、じゃあイーブイ、お前は？お前は、俺について来てくれるか？一緒に行きたい？」

「ぶいー」

しゃがんで尋ねると、につこり笑って頷ぎいたイーブイが、俺の手に頭をこすりつけた。

「ほんとにいいのか？先生とお別れしたら、寂しいだろう？」

よじ登ってきた体を抱き上げる。上機嫌にぺろぺろと顔を舐められる。たぶん、俺を選んでくれた。そう思ったら俺の心がぶわっと暖かくなった。懷いてくれてるのは知ってたし、俺も気軽に接してたけど、まさかついて来てくれるとは思ってなかった。

「君は変なところで遠慮しいというか、考え過ぎな所があるから、その子ののんきさは助けになるはずだよ」

…病院を出てから初対面の人ばかりで、1人になれる時間もあまりなかったから、被った猫を下ろす暇なかったんだよね…つまるところ気が休まる暇がなかったことに、今更気付いた。つつか気付かされた。

先生とイーブイはお見通しだったんだろうか？

「ワカナ、今夜も3人でご飯になるよ」

「ちー！？」

俺達のやりとりをただ見つめていたチコリータを抱き寄せる。少し暴れても気にしない。

「有り難う…有り難うございます。イーブイ、しっかりお預かりします」

「うん。ワカナちゃん、悪いけど男2人の面倒を見てやってね。2人ともマイペースなところがあるから」

「ち、ちこっ？」

もう決定なの？と言う風にチコリータが目を見開いた。

「ワカナは、嫌か？」

「……」

「ぶいー」

「ちーっ!？」

「ぶっ」

問いには沈黙が返った。しかしにこにこ上機嫌なイーブイは、よろしく、とでも言うようにチコリータの顔を舐めて、驚いたチコリータがぴんと頭の葉を立てて、それが俺の顔にヒットする。

「ちーちこちこちー!」

「ぶいぶいー」

「ちこーっ!」

「痛い痛い痛い、膝の上で暴れないで」

のんきに笑うイーブイに怒鳴って、チコリータはまたぺしぺしと叩き出した。イーブイが逃げ出し、それをチコリータが追う。喧嘩というよりはじゃれあいに見えた。

「うん、なかなかいいチームなんじゃないかな」

「今のやりとりのどこを見たらその結論が出るんですか」

「君は以外と警戒心が強いし、ワカナちゃんは意地っ張りだから。」

「コミュニケーション不足になりがちじゃないかい？」

「コミュニケーション不足、ねえ。」

「自覚ないって顔だね」

「はあ、警戒心が強い自覚はあるんですが…コミュニケーション不足ってわけじゃなくて、まだお互い距離を測りかねてるだけだと思います」

「そうだねえ。だから、イーブイがいい緩衝材になってくれるよ」

チコリータは、まだ俺を見極めているのだと思う。

俺だって初対面から仲良くてのは、猫を被ってないと難しい。となれば本性を出せるようになるまで、どこかしら他人行儀な関係になっってしまう。

そんな俺でもものきなイーブイにはすぐ打ち解けられた。だからチコリータもイーブイにはすぐに打ち解けて、その波及効果で俺達の関係も良くなるんじゃないか、と言うことだろう。

「そうですね」

「そうだよ」

先生は笑って俺の頭を撫でた。やめて、俺もあんたも成人男性なんだからやめて。撫でられるなら女の子がいいよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597y/>

俺とポケモンと冒険

2011年12月2日18時52分発行